# Final Fantasy XV, Return of the King（旧題　ファイナルファンタジー15　新世の王）

レレレのレイド

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ノクトは使命を果たした・・・しかしノクトの戦いは終わりでなくまだ始まったばかりだった

ストーリークリア後の話

なるべくぼかしますがネタバレ全力ですので注意!!

設定

ラスボスを倒した後のノクトが本編開始直前に精神とファントムソード全種持ってタイムリープし色々する話。

青年ノクトのステータスは初期値設定

おっさんノクトはカンスト

一度王様になったことで態度に多少変化あり

１／８タイトル変更＋６章追加

# 目次


0章「巻き戻る世界」 1
1章「王都インソムニア」 6
2章「救出」 12
3章「王の戦」 20
4章「王子の初陣」 29
5章「うつろわざる王」 37
6章「代償」 47
7章「反応」 57

# 0章「巻き戻る世界」

ノクトは暗闇の中を漂っていた。
自分はシガイに侵されたあの男を葬って消えたはず・・・・だった
それが今では何もない暗闇の中を漂っている。
何も聞こえない、何も見えない無明の地獄を
「・・・・・・・・」
「ノ・・・・ト・・・・」
「ノクト・・・・・・」
「？」
俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。
この声の主を俺は知っているような気がする・・・・だが思い出せない。
「ノクト・・・君が真の王になるための準備が整ったよ・・・・」
「君が・・・・・・」「あんたが・・・・・・」「あなたが・・・・・・」
「お前が・・・・・・」
「「「世界を守るんだ」」」
色んな人の声が俺に語り掛けてくる。
世界を守る？俺は世界を救い死んだ・・・その筈だ。今更世界を守る力などもはや無い。
すると今度は重厚な声が聞こえてきた。
「選ばれし王・・・・ノクティス・・・我・・剣神バハムートがそなたの使命を果たす様を見届けさせてもらった・・・選ばれし王よ・・・そなたの精神と王の力を次の世界へ送り届けよう・・・そなたの果たした使命・・それは時間をも超えて影響が現れるだろう・・・我・・・剣神バハムート・・・ノクティスを真なる王として認め次の世界でも力を貸そうぞ・・・・」
バハムートの声が途絶えた途端、辺り一面を閃光が覆い、俺の意識は途絶えた・・・・

ブラッドホーンの討伐が完了しレガリアの回収に行こうとする場面からです。（キャンプでの休憩をしているので1日経過しております。）

「さて、つぎの運転役だが・・・・・ってどうした？ノクト」
「グッ・・・・・」
先頭を走っていたノクトが突如として立ち止まり頭を抑え込み始めた。
「ノクト。どうした頭痛か？」
「え？何々？ブラッドホーンにやられすぎて体調悪くなった？」
「おいおいノクト。もうへばっちまったのか？」
「・・・・っ頭いてぇ・・・・」
目を開けるとそこはブラッドホーンを討伐した荒野の一角・・・ルーナとの結婚式のために親友たちと旅へと出た次の日であった。
「・・・・嘘・・・だろ・・・」
「何言ってんだノクト。大丈夫か。」
グラディオラスたちがノクトの豹変に心配してくる。
「なあ・・・・俺らって今何してたっけ？」
「はあ？ノクトついにボケたか？今から車引き取りに行くところだろうが」
グラディオの発言からどうやら、デイヴの依頼を完了したところまで遡っているようだ・・・・
※前の世界のことを便宜上前世とします。
・・・確か俺が前（前世で）見たニュースでは今日の昼すぎ辺りに和平調印式と王都襲撃が発生したはずだ。
慌ててスマートフォンの時刻を確認し今が8時過ぎであることを確認する。
まだ8時ならば今すぐに王都に戻れば親父を助けることが出来、ルーナとも会えるのでは・・・・
この考えに至ったとき思わず行動せずにはいられなかった。

ノクトはほかの三人を置いて走り出す。
「!?おいノクト!!待てって・・・おい!!」
「どうしたノクト。先程の頭痛からお前は何か様子がおかしいぞ。」
「王都に急いで戻るぞ・・・・今すぐにだ!!」
ノクトの言葉に一行が驚愕する。
「へ?ルナフレーナ様との結婚式に行くためにガーティナに行くんじゃなかったのかよー。ノクトー」
「今から王都に戻る必要性が全く見当たらないのだが・・・・」
「王都に戻る余裕など無いだろうがお前の身勝手な行動でルナフレーナ様を待たせるつもりか?ノクト。」
三人の言葉は至極当然の言い分だろう。
だが未来から来たノクトにとっては・・・以前との同じ行動は愚の骨頂でしかない。
「今は結婚式どころじゃねえしそんなのどうでもいい。時間がねえんだ。急いで王都に戻るぞ!!」
そう言い切り他三人を置いて走り去るノクト。
今はまだ8時前・・・・間に合うはずだ。
「あ?っておい!!」
三人を置いてノクトが走りしたのを見て慌てて三人が追いかけてくる。
グラディオやプロンプトが叫んでいるが気にする余裕はない。
シフトをフルに活用し、ほかの三人よりも早くハンマーヘッドへとたどり着いたノクトはシドニーの説明を流しつつレガリアへ乗り込もうとする。
「待たせたね。ほらキレイに・・・・・ってほかの三人は?」
「もうすぐ来る。整備してくれたとこ悪りィけど王都に戻るわ」
「え?ちょ・・・それってどういう「ノクト!!!!!」
そこに怒号と共に息を切らして寄ってくる親友たちの姿があった。
「いい加減にしろノクト!!何も説明せずいきなり結婚式どころじゃないってどういうことだ?あぁ?勝手にするのもいい加減にしろよ?」
グラディオラスに胸をつかまれ怒鳴りつけられる。

そんな状況だがノクトにとっては争う時間も惜しいため手を振り払い運転席へ乗り込む。
「グラディオ、今は説明してる暇なんてねえって言ってんだろーが!!」
「ノクト、事情が分からなければこちらとしても動きようがない。王都に行く道でいい。話してくれるか？」
「・・・・・ああ分かったよ、イグニス・・・いいから乗れ。」
「ノクトの運転て・・・大丈夫かなあなんか不安だよー・・・」
発言をあっけなく無視（気にする余裕がなかった）されうなだれるプロント、イラつき舌打ちをするグラディオラス、冷静なイグニスらがレガリアへと乗り込み一行は急きょ王都インソムニアにとんぼ返りすることとなる。
だがその前にノクトはシドニーに伝えることがあった。
「ああそれとシドニー、悪いが荷物の配送は遅れるしいつ届けられるかわからねえわ。」
「荷物ってええっ？」
シドニーが答える前にレガリアが猛スピードで走り出していった。
「私、荷物のこと話してないよね・・・・ノクト、何でそのことを知ってんだろう。」
残されたシドニーはこれから頼もうとしてた依頼のこと何故、ノクトが知っていたのか。
ガーディナへは向かわず急きょ王都にとんぼ返り、それも猛スピードで行くわけを聞きそびれてしまった。

王都へ戻る道中
ノクトは王都に戻るわけをかなり大雑把にだが説明していた。
「今日の昼頃にインソムニアの王城で帝国との和平調印式があるはずだ。俺の記憶が正しければ調印式は偽装で帝国によるクリスタル強奪と王都襲撃が同時に起きる。」
「なんだそりゃ。起きてもねえのによく断言できるな。」
「記憶が正しければ・・・？ノクト、あの頭痛が起きた時に何を視た？」
「未来予知ってやつ？ＲＰＧとかじゃレアな能力じゃん。ってか調印

式が偽装ってマジ？」
　意味が分からんと頭を振るグラディオラスと発言から何かを見出したイグニス
　未来予知に興奮するも内容に唖然とするプロンプトに対し
「詳しいことは俺にもわかんねえ。でも、帝国は和平を結ぶ気はさらさら無いし、親父もそのことを感づいてたから俺を逃がすために送り出したんだ。何も言わずにな。で、親父は王城で帝国の連中と戦争する気満々で臨んだけどクリスタルは強奪され、敵には返り討ちにされたってのが俺が現状知っていて言えることだ。・・・・・それに王城にはルーナもいるはずだ。」
「ルナフレーナ様が？」
「ああ。経緯は知らねえけどよ。おおかた帝国に無理やり連れてこさせられたんじゃねえの？王都襲撃で俺とルーナは死んだことにしてたみたいだからなっともうすぐインソムニアだ。まだ襲撃が起きてねえようだな。・・・・これなら間に合いそうだ」
　インソムニアに続く大橋に差し掛かり王都の外壁が見えてきた。時間は９時・・・まだ余裕はあるが急がなければ。
「外壁を越えればもうすぐ王城が見えてくる・・・わりいけど、お前ら飛ばすからしっかりと掴まってろよ。」
「くれぐれも事故はしないでくれ。ノクト。」
「やっぱノクトの運転荒いじゃーん。怖えーよー!!」
「安全運転でよろしく頼みますよ。王子様!!」
　ノクトは国やルーナを守るという使命感と間に合うのかという焦燥感を抱え、
　他三人は半信半疑ながら王都につくまで事故らないよう戦々恐々しながら
　ノクトら一行を乗せたレガリアが猛スピードで王都へと向かう。

# 1章「王都インソムニア」

午前11時00分　王都インソムニア　大通り　（王の剣によるルナフレーナ奪還作戦を展開中のこと）

「インソムニアに着いたな。ノクト、俺たちはどうすればいい？」

「あぁ・・・・まずは王城に行くぞ。んで、お前ら三人はクリスタルの護衛を頼むわ」

「起きるかどうかもわかんねえのにクリスタルの護衛ってやり過ぎだろ。」

「ノクトの言うことがホントに起こるかどうかわからないけど俺もグラディオの意見にさんせーい。」

王城まで10分弱で行ける距離だが、交通規制による渋滞の為、車が進まないので車内で今後のことを話し合っていた。

「で、ノクトは俺らがクリスタルを護衛している間に何をする気だ？場合によっては・・・・」

「グラディオ、悪いが今回はマジだ。お前らがクリスタルの護衛をしている間に俺は親父とルーナを探す。仮にクリスタルが強奪され第二魔防障壁が破られ魔導兵と魔導船が王都に来た場合のことに関してもある程度、俺に考えがある。任せてほしい。」

「・・・っちしゃーねえな。お前がそこまで言うなら頼まれてやるよ。」

ノクトの真摯な訴えに渋々承諾するグラディオ

「ノクトー、その考えって何さ？」

「悪いプロンプト。それはまだ言えねーわ。」

「ノクト、戦闘に関して大丈夫なのか？仮に帝国が侵攻してくるならそれこそ精鋭を送り込むだろう。それをお前ひとりで切り抜けられる自信はあるのか？」

過去のノクトしか知らないイグニスの指摘は尤もな話であるが、未来で場数を踏み、王の力を扱える現状のノクトには十二分切り抜けられる自信があった。

「どうにかなるだろ。ここは敵地じゃないんだ味方もいるからな。俺一人じゃ太刀打ちできなくてもお前らや味方の力を借りれば切り抜

けられる。だからイグニス大丈夫だ。信じてくれ。」
「確かに王城には王の剣や不死将軍と言われるコル将軍、王の盾のクレイラス将軍がいる。やばくなったら助けを呼べ、いいな？」
　イグニスの発言にサムズアップの仕草をしつつ返答する。
「はいはいわかってますよーっと。俺はシフトを使って先に上階に行ってクリスタルの確認してイグニスたちを待ってるわ。」
　ノクトがさらっと言ってのけた発言に三人は驚愕する。
「えーまじで？エレベータいらないじゃん。ノクトってすごいねー」
「待てノクト。シフトを使うってさすがに王城まで届かねえだろ。」
「届かせるに決まってんだろうが。だから心配すんなって・・・・っと動くぞ。」
　ノクトが言い終えるとともにレガリアを前進させる。
　目的地は王城に至る門の前だ。だが、和平式典で王城とその周辺は規制が引かれ進入することができないことは容易に予想できるのである程度進んだらどこかのパーキングか路上にレガリアを止めて行くことを検討しなければならないだろう。
「・・・・やっぱ混んでんのな。」
「すっごい渋滞だねえ。みんな式典を見に来てるのかな？」
「だろうな。帝国のイドラ皇帝が来てるんだ。車線は規制されるだろう。それに戦争が終わるということで観衆も集まるだろう」
「・・・・・戦争が終われば・・・・な。」
　俺の知る限りの展開ではクリスタルが強奪され、王都は戦場となりそこで親父は死ぬはず・・・・
　そう考えるとハンドルを握る手に力が入ってしまう。落ち着かなければ。
「このまま車で行っても埒が明かねー。どっかにレガリア止めて降りて王城に行くぞ。」
「ああ。そのほうが早く着きそうだ。車でノロノロ進むのは俺の性に合わん。」
　ノクトの言葉にグラディオは賛同する。
　すると茶化すようにプロンプトが

「グラディオって気が短そーだもんね」
「んだと!?プロンプト!!」
「頼むから騒ぐのはやめてもらいたいのだが・・・・」
「おめーらうっせえから」
騒ぐ二人をよそ眼に運転するノクトと助手席のイグニスが自制を求める。
運転中に運よく空いていた近くの路上にレガリアを止め、
「んじゃ行きますか」
ノクトたちは徒歩で王城へと向かうことにした。
できるだけ王城のクリスタルの間が見え、人混みが少ない通りを選んで進む。
「停戦はんたーい!!」「領土の放棄って和平じゃなくて降伏に近いわよねー」
「戦争がようやく終わるな。」
和平交渉の内容に対し口々に言う市民をよそに黒服四人は王城へと突き進む。
ある程度進み人がまばらな場所まで来たとき、ノクトが口を開く。
「良し・・・・ここからならクリスタルの間が見えるな・・・んじゃ俺は先に行くわ。お前らは正面から入って上がってきてくれ。」
ノクトが右手を大きく振りかぶり王城に向けて瞬時に展開した賢王の剣を常人の目には映らない勢いで投げつけ次の瞬間には姿が消えていた。(常人では手を振っただけのようにしか見えていない)
残されたグラディオラス・プロンプト・イグニスは唖然としながら
「あいつほんとにあのノクトか?」
「わからない・・・だがノクトにあそこまでのシフト能力はなかった筈だ。」
「なんかさーよくわかんないけどノクトなんだけどノクトじゃないって・・・・感じ?」
「なんだそりゃ。」
口々に言いたい放題のことを言っていた・・・・・
正午

王城　外壁

ノクトはシフトを用いてクリスタルの間近くの階の王城外壁へと転移していた。

外壁近くの部屋の窓を武器を使い物理的にこじ開け城内へと潜入しクリスタルの間近くの空き部屋に身を隠しながらクリスタルの間へ続く通路を監視していた。

どうやら王軍が警備しているところを見るとまだクリスタルは奪われて無い様だ。

ノクトが安堵してグラディオたちに連絡を入れようとしたとき・・・・・異変は起きた。

連続した鈍い破裂音、銃声が城内に響き渡る。

「何!?ここの警備はどうなってんだよ!?ザルなのか?」

クリスタルの間付近まで帝国兵が侵入していたことに驚き、王城警備の手薄さを愚痴るノクト。

だがノクトの体は自然と動いていた。

帝国兵の背後から愛剣のエンジンブレードを投げつけシフトブレイクで一人目を仕留めると、すぐ横の兵を空いた手に賢王の剣を召喚し切り付ける。

背後からの突然の奇襲という思わぬ伏兵に陣形を乱す帝国兵に立て直した王軍が銃撃を仕掛け次々と帝国兵を打ち倒していく。

ノクトは王軍や帝国兵両軍が放つ銃弾の中をシフトを使い槍を召喚してシフトブレイクで貫いたりマシンナリィのオートボウガンの衝撃波で範囲攻撃を仕掛けるなど移動しつつ攻撃しひたすら帝国兵を倒し続けた。

「・・・・・・っやば!!」

１０～２０人いた帝国兵を残り数体まで減らしたところで視界がぐらつきうまく体がコントロールできない状態になりここでノクトは大きな誤算に気が付いた。

そう、今のノクトの体はまだ実戦慣れしておらず体力的にも魔力的にも全盛期には程遠い状態である。それを考慮せずに全盛期と同じようファントムソードやシフトをしようし体力や魔力をガンガン使

用していったらバテる（ピンチ，ＭＰバースト）のは至極当然の話であった。
だがこちらの状況など敵である魔導兵には関係のないことである。
ふらつきうまく定まらない視界の中、帝国兵の銃口がこちらに向けられ・・・・・・・・・・

帝国兵が吹き飛んだ。

「おいおい・・・どこの誰だっけなぁ？一人でも戦闘はどうにかなるって言った大馬鹿野郎は」
「やっぱりノクトはノクトだったねー途中すごかったけど最後かっこ悪ー」
「飛ばし過ぎだノクト。あの戦闘力はすさまじいものがあるがあれでは最後まで持たないだろう。」
「・・・・るっせー・・・よ。・・・俺の・・・言った・・・・通り・・・・だろうが。」
ふらつきながらも自分を援護してくれた人物らを視界に映した。
そこには頼りになる親友たちの姿があった。
「俺一人で・・・・やれることなんてたかが知れてる。お前らや・・・・皆が支えてくれるから俺は戦っていけんだよ。」
深呼吸し呼吸を整えてから親友たちに礼を言う。
前世でもそうだった。ルーナに導かれ、親友たち、コル将軍ら仲間の協力がなければ俺は使命を果たせなかっただろう。
「わりー助かったわ。」
「な・・・なんか照れるなあ・・・」「いいってことよ」
「どうやらノクトの言った通りの展開になってきたな。」
ノクトの礼に照れるプロンプトにぶっきらぼうに返答するグラディオ、ノクトの言ったことが当たり状況を見極めるイグニスと反応はさまざまである。

「ノ・・・・・ノクティス様!!???」
そこに生き残った王兵2名が駆け寄ってくる。
彼らからしたら突如現れ帝国兵を屠っていったノクトに驚くのは当然だった。
ノクトは生き残った兵に振り向き働きを称える。
「援護むちゃくちゃ助かったわありがとな。んでクリスタルの護衛おつかれさん。」
「めっそうもございません!!」
感謝の気持ちを伝えたノクトはこの場の全員に向かい今後のことを念頭に人員配置を語りだした。
「お前たちとプロンプトとイグニスはここの防衛をおこなってくれ、ここがクリスタルの最終防衛ラインだ。なにがなんでも死守しろ。グラディオは俺と行動して城内の状況を把握をしつつ増援を呼ぶぞ。」
「はっ!!」「まっかせておけー」「了解した。」「おう。」
ノクトは階下に向かう前にプロンプトとイグニスにあるものを渡す。
「俺が錬成した魔法瓶だ。中にはそれぞれサンダーとファイアが入っている。要所要所で使え。3回しか使えねえから無駄遣いすんなよ？いいな？」
「サンキュー、ノクト。」「助かる。」
渡し終えたノクトは彼らに向け宣言した。
「レギス王が長子、ノクティス・ルシス・チェラムの名において命ずる!!・・・・・死ぬな!!以上だ。」
彼らは
「「「「っは!!」」」」
ノクトの突然の命にプロンプト並びに王兵らが敬礼し、ここに王都インソムニア攻防戦へのノクトの介入が始まった。

# 2章「救出」

１４時　王城　和平調印式会場

帝国宰相アーデンは予定の時刻になっても報告がないことに気になった。

「んー。どうやら予定が狂ったみたいだねぇ。向こう側が一枚上手だったのか、それともーこちらの手札がひ弱過ぎたのかわからないけど。少々時間がかかるけど、第二プランで行くとしますか。」

アーデンはそう独り呟いたのち近くの兵に小声で何かを伝え、イドラ皇帝のもとに歩みより小声で話しかける。

「予想外に苦戦しているようです。第二プランの準備を進めます故、皇帝陛下にはもうしばしお時間をお稼ぎいただきたい。」

「フン・・・・・使えぬ者どもが・・・構わぬ。奴との会談は不愉快ではあるが・・・しくじるなよ、アーデン。」

「御意。」

皇帝陛下の了承も得たことで第二プラン開始の旨を通信機で伝え始める。

「王城内部の帝国兵に伝達・・・第一プランが失敗した可能性があるため、これより第二プランを開始する。クリスタルジャマーの使用を許可する。繰り返す、クリスタルジャマーの使用を許可する。ジャミングが成功し魔法障壁が解除され次第待機している艦隊に連絡を入れを王都に突入させ・・・クリスタルを奪取せよ。」

そう命じアーデンは議場を後にする。アーデンには第一プランを邪魔してくれた存在が気になっていた。

王城内の内通者の情報から警備の情報は把握済。囮の救出の為、王の剣は不在。力のあるものは議場におり王城内の警備は非常に手薄であるはず。投入した帝国兵がいかにぼんくらであろうともあの物量での奇襲に護衛の王兵が耐えられるわけがないのだ。

「そんじゃ・・・俺は第一プランを邪魔してくれたイレギュラーの確認でも行きますかねぇ。向こうさんが用意した秘策とやらが何なのか楽しみだ。」

口元に笑みを浮かべ彼は議場を後にする。

場所は変わって王城クリスタルの間、階下

ノクトとグラディオは少なくない帝国兵を蹴散らしつつ議場へと向かっていた。

「っクソが!!」

議場に向かう最中、目の前に帝国兵と交戦している兵の一団を見かけるとその一団に向かいシフトを用いて即座に向かう。

今にも帝国兵に殺されそうな兵士を背後から伏龍王の投剣の一撃を食らわせ瞬時に屠り助ける。

流れる動作で別の帝国兵に剣を投擲し攻撃が当たる瞬間にシフトで転移し十文字に切り裂く。

帝国兵の目がノクトに向いたその隙をグラディオが見逃すはずがなく、大剣を敵にぶん投げて帝国兵を吹き飛ばす。

一通り帝国兵を殲滅したらノクトは助けた王兵に声をかけた。

「大丈夫か!?」

「ノ・・・ノクティス様!?どうしてこちらに!?」

「どうやら大丈夫そうだな。悪いが生き残った連中を纏めて上に行ってクリスタルの護衛をしてくれ。帝国兵らは俺らが倒す。」

「っは・・はい!!!」

ノクティスは兵士の質問を無視して指示を下す。

襲撃が始まっているのだ。もはや一刻の猶予もない。

「今の戦闘といい、その状況判断からの指示といい、ノクトお前何があった?・・・・っとすまねえな今はそれどころじゃねえな。後で説明してくれよ?」

「ああわかった。約束する。・・・・っ!!」

少ししてフロアの制圧が終えグラディオと軽い会話をこなした時、さらなる異変が起きた。

突然、王城の四方から赤い閃光が昇り王城を覆い囲んだのだ。

「なん・・・・だこりゃ?」

状況がつかめず困惑するグラディオに対しノクトはある感覚を感

じていた。
かすかな違和感。この感覚をノクトは覚えていた。確か・・・・前世のジグタナス要塞で感じたものとほぼ同一、だが影響力は前世の比にならないくらい弱いものだ。あの時とは何かが違うのだろうか。こちらの魔法には影響がなさそうだ。
「・・・・ジャミング・・・」
「ジャミングだと?帝国の連中は一体何をジャミングしてんだ?」

「そりゃあクリスタルの力に決まっているだろう?」

「・・・・テメェは!!」

突如響く声に振り向くノクトは宿敵の姿を目にする。
前世におけるルーナの仇であり自身の祖先でもあり世界を破滅させようとする追放されし王
今は世界最強の帝国の宰相にして帝国の実権を握る男。
「あんたは一体・・・」
「あいつはニフルハイム帝国宰相・・・アーデン・イズニアだ。」
「だーいせーいかい。初めましてノクティス王子。俺の顔と名前を知ってるなんて意外だねえ、それがお前さんの素顔ってわけかい?・・・まあいいや、どちらにしてもお前さんにはしてやられたよ。こちらの裏を斯いて王城に戻っていたとは・・・・さ。おまけにこちらが差し向けた帝国兵の一個中隊を殲滅するだなんて予想外にもほどがあるねえ。さすがは・・・選ばれた王だけはあるってことかな?」
帝国の宰相が現れたことに驚くグラディオらに対し、ノクトは冷静だった。
王の武器を集め六神の啓示を受けた上で力を蓄え、光耀の指輪をつけた状態でようやく勝てた相手だ。今の状態で戦いを挑んだとして

も勝てないことぐらい直感で分かっていた。
「クリスタルのジャミング・・・まさか!?てめえら帝国の目的は魔法障壁の破壊か!?」
「へえ・・・それも正解。ただの道楽王子ってわけじゃない訳・・・か。クリスタルジャマーってさあ魔法障壁内部からじゃないと発動しても意味ないんだよねえ。じゃあさ、俺たちが次することもわかるでしょ？王子？」
魔法障壁が無くなれば、魔導船の侵入は容易となるだろう。
帝国は襲撃に備え、大規模戦力を差し向けていたはずだ。それが容易に王都に侵入できるとなると・・・・・・
この瞬間、クリスタルの奪取を防ぐということは不可能に近くなったことをノクトは悟った。
「グラディオ!!今すぐ上に行ってクリスタルの間を守っている連中に伝えろ!!クリスタルの奪取は避けられない!!戦力温存・・・いやお前たちの命の為のためにもそこからすぐに離れて議場へ向かえと!!」
「・・・・ごだごだ言ってる暇はなさそうだな。わかった伝えてきてやる・・・が、ノクトお前は絶対死ぬなよ!!」
「宰相とやりあうつもりはねーよ。頼んだ!!」
現状で最善ととれる選択をとりつつグラディオと別れ、ノクトはアーデンと向き合う。
「へえ。俺と・・・戦わないとはどういうつもりなのかな？臆病風に吹かれたのかい？」
「テメエは今の俺とやりあっても何の意味もないだろうが。俺が力を蓄えてからクリスタルと未来そのもの同時に叩き潰すまで手を出さない。アーデン・イズニアはそういうしちめんどくせえ男のはずだったと思うが？」
アーデンの挑発に対し未来でしか知りえない事実を交えて挑発で返すノクト。
アーデンの纏う空気が一瞬変わったが気にせず口を動かす。
「アーデン・イズニア、お前の相手なら後でたっぷりしてやるからそれまで我慢しておくんだな。」

「ハハッハハハハ!!・・その言葉・・・・覚えておこう・・・じゃあまた会おう。・・・ノクト。」
ノクトの台詞に笑みを浮かべ身を翻し立ち去るアーデン。
手をひらひら振りながら去るアーデンは立ち去り際にノクトに対しとある爆弾を投げつける。
「あ、そうそう。ノクト、愛しのルナフレーナ様ならあの魔導船団のどこかにいる。お救いしてやりなよ。ま、あそこまで行けるならばの話ならな。じゃあ、その時を楽しみにしてるよ。選ばれし王様。」
「・・・・・・・っ!!」
アーデンの言葉に返答する前に上のほうからガラスが割れるような音が響き渡る。
これは・・・・第二魔法障壁が崩れ去る音だ。
「帝国のやろう・・・・王城で好き勝手しやがって・・・・」
アーデンの言うことは気に食わないが今後の指針は決まった。
ルーナの救出のためにノクトは魔導船に乗り込むことを決意しバルコニーを目指す。
15時　王城　バルコニー
バルコニーへと出たノクトは魔導船を確認して違和感を覚える。
「ん?あの魔導船燃えてねーか?」
そう、大型魔導船の二隻が炎上しているのだ。
そういえばここまで王の剣の隊員と一人とも会っていない。もしかしたら・・・・
「あの魔導船に乗りこむか・・・」
飛王の弓を召喚させ、炎上する魔導船に向かい矢を打ち込み矢に対しシフトを使う。
一回でのシフトで届かないのは承知していたため転移直後に再度弓を打ち込みシフトを行う。三度同じことを繰り返し魔導船よりも高い位置に転移し内部がよく見えてきたところでノクトは異様なものを目にする。
「・・・!?あれは魔獣か!?」
爆発炎上する魔導船内部から見えたタコの魔獣を目にしたノクト

は落下中にも関わらず魔獣目掛けて矢を放ちシフトブレイクを行い攻撃した・・・・・。

ルナフレーナがタコの化け物に捕らわれ救出を試みようとしたニックスは破壊された隔壁から化け物目掛けて飛んできた矢に目を奪われる。

「なんだありゃあ・・・・・?」

次の瞬間、ニックスも目にしたことがあるシフトの転移現象が発生し、王都にいないはずの黒服の少年が出現した。

「・・・・!?あれは・・・・ルーナ!!」

「ノク・・・ティス・・様?」

化物に捕らわれながらもノクトの姿を見つけたルナフレーナは呆然とノクトの名を呟いた。

涙がこぼれそうになる。

「ルーナ!!今助けるから!!我慢してくれ!!」

ルーナを見つけたことでノクトの胸中にくるものがあるが今はそういう場面では無い。ノクトは気持ちを切り替え化け物に対し全力で戦闘をすることを決めた。

今まで使わなかったが現状で出せる力の限りを尽くしてあの化け物を叩き潰してルーナを助ける。

ノクトは周囲に十三のファントムソードを展開する。

タコ足が自身に迫ってくるのをシフトで移動し回避しながらタコ足の一本に賢王の剣を投擲しシフトブレイクで攻撃する。

突き刺した賢王の剣をそのまま切り上げ足を蹴飛ばして距離を取りつつ伏龍王の投剣を投擲し投げつけた姿勢のまま神凪の逆鉾を更に召喚しやり投げの要領で続けざまに投げつける。

伏龍王の投剣がタコの目元に神凪の逆鉾がルーナが掴まっているタコ足に刺さったところでシフトブレイクを連続で発動させ高速移動しながらひたすらに攻撃を加えていく。

ノクトがすさまじい戦闘を繰り広げタコの足が次々切り落としている中、ニックスの周囲に裏切っていない王の剣メンバー3人が集結

する。近くには彼らが脱出用に確保した魔導船が接舷している。
「ニックス!!無事だったか・・・・あれはいったいなんだ!?」
「さあね・・・あれはノクティス王子だ・・・・丁度、ルナフレーナ様が掴まったところにノクティス王子が来て戦闘が始まった感じだな。恐らくルナフレーナ様には
ノクティス王子がヒーローのように見えるかね。」
「お姫様を救う王子様・・・・ってか」
「おとぎ話みたいな展開ね。」
「はは・・・・違いない。あのタコもだいぶ弱ってきてる。今のうちにルナフレーナ様をお救いするぞ。」
そうニックスが言い切ると王の剣の全員が支柱を蹴りタコへ飛び掛かる。
ニックスはルナフレーナが捕らわれる近くのタコ足にククリ刀を投擲しシフトを行い救出に当たり、他の3名はサンダーやファイアなど魔法で攻撃しノクトを援護する。
王の剣の隊員が放った魔法がタコに直撃しノクトの攻撃で怯んだ隙をついてニックスがルナフレーナを救出した。
「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!これで・・・・・止めだ!!!!」
ノクトは王の剣の隊員がルーナを救出したのを横目で見るとともに。この戦闘を終わらせるべく持てる力の限りを尽くす。
タコに夜叉王の刀剣のシフトブレイク、闘王の刀による高速の居合いによる連続攻撃を加え、止めにと覇王の大剣を召喚し脳天を貫く。
「・・・・・じゃあな!!」
タコに別れの挨拶を言い蹴って距離を取るとともに予め精錬していたファイラを投げつけルナフレーナと王の剣の隊員が避難した小型魔導船にシフトした。
転移直後、大型魔導船内で大爆発が起き小型魔導船を大きく揺らす。
「はぁっはぁっ・・・・慣れない・・・はぁ・・・ことは・・・・するもんじゃないな。」
その場でへたり込むノクトを王の剣隊員が出迎える。

「見事な活躍でした王子!!」「これが愛の力ってやつかすごいもんだ・・・」

「ノクティス様・・・・」

へたり込んでいるノクトにルナフレーナが歩み寄る。

ルナフレーナの言葉に顔を上げる最愛の人物を視界に収めるノクト。

「ルー・・・ナ。」

ノクトは疲れているのにもかかわらず体を起こしルナフレーナの下に駆け寄り・・・・

その華奢な体を強く抱きしめた・・・・

「・・・今までっ!!会えなくて・・・・ゴメン・・ルーナが辛かった時に俺は何もしてやれなくて・・すまなかった・・っ・・・・ルーナは世界のことを考えているのに俺は・・・俺はっ・・・!!」

ノクトの慟哭に涙を浮かべながらルナフレーナもノクトを抱きしめる。

「ノクティス様・・・やっと・・・やっと会えた。やっとお声が聴けました・・・私は今、ノクティス様にお会いできて本当に・・・本当にうれしいです・・・・っ!!」

お互い涙を流しながら固く抱擁する二人。

王の隊員からしたらほんのわずかな時間だが彼らにとっては永遠にもとれる長さの抱擁であった。

まだ王都攻防戦は始まったばかり・・・・・・だがノクトの介入により攻防戦の経緯が大きく変貌したということは誰も知らない。

# 3章「王の戦」

15時　王都上空　小型魔導船

ノクトはルーナとの抱擁を解き、王の剣隊員と向き合い礼を言う。

「・・・・あんたらは、王の剣の隊員だろ？・・・・・ルーナ・・・・・いや、ルナフレーナを助けてくれて助かった。ありがとう。」

「どういたしましてノクティス王子。こちらとしてもいいもんが見れたぜ。だけどな・・・・ルナフレーナ様の救出は俺たちの任務だったんだ。だから、王子に感謝される筋合いはホントは無いんだぜ？」

ノクトはルナフレーナ救出の感謝の礼をするがそれを王の剣の隊員らは固辞する。

彼らは国王レギスの命でルナフレーナ救出の任務にあたっていたのだからルナフレーナの救出は至極当然のことである。むしろあのタコの魔獣（オルトロス）を倒し、こちらの危機を救ってくれたノクトに対して礼を述べたいくらいであった。

「だけども・・・だ。・・・・・えっと・・・・」

「ああ。悪い悪い自己紹介がまだだったか。俺はニックス・ウリック、よろしくな。ノクティス王子。」

「私はエクレール・ファロン。」「俺はロッソ・レファール。よろしく」

「カニス・ダンだ。よろしくノクティス王子!!」

ノクトが隊員らの名前を言おうとまごついたところでニックスら王の剣の隊員たちが自己紹介を行う。

「あぁ・・・よろしく頼むわ。それより、ノクティスって呼ばれんのは好きじゃない。・・・ノクトでいい。ルーナもノクトって呼んでほしい。」

先程からノクティスと呼ばれることを気にしたノクトはルーナ含め全員に言う。

堅苦しいのは苦手だ。もっと砕けて話してほしい。

「わかりました。ノクティ・・・・いえ、ノクト様。」

「わかりましたよ。これでいいですかね？ノクト王子？」

ルーナは昔からノクティスと呼んでいたのでノクティスと呼び慣

れているのであろうが、ニックスはニヒルな感じで呼んでくる。
　だが、名前の呼び方より今はすべきことがある。ノクトはそちらのほうに話を向けることにした。
「様も王子もいらねえよ。それよりもこの魔導船、王城に向かってんだよな？どれくらいで着きそうだ？」
「今のスピードならあと１０分ちょいってとこかい？先の魔導船爆発で動力の何処かやられたのか思うように出力が上がらねえ。時間を縮めようとするのはちと難しいなぁ。」
　先のタコとの戦闘で生じた爆発が影響してるようだ。やり過ぎたことを少し反省しつつも前向きに考える。
「わかった。できる限りさ、急いで王城に向かってほしい。」
「わかってますよ。ノクト王子。ところで王城で何があったのか話しちゃくれませんかねぇ？俺たちは魔導船であの赤い光が立ち上った後に第二魔法障壁が崩れ落ちていく様子しか見てないもんでね。ドラットー将軍とも連絡がつかないし。」
　ニックスは操艦しながら自分やルナフレーナが今、知りたかったことを聞いた。
　ニックスたちは王城での出来事を一切知らないのだから事情を知っていそうなノクトに聞くのが一番いいと思ったからである。

「あぁ。あの光は帝国が用意したクリスタルジャマーってやつで文字通りクリスタルの力を阻害する装置なんだとさ。元々は帝国兵の部隊がクリスタルの間を吸収してクリスタルの間を破壊し第二魔法障壁を止める算段だったらしいが俺たちが邪魔したおかげでクリスタルジャマーの使用による直接奪取に切り替えた・・・らしいわ。」
　ノクトは王城でアーデン・イズニアから聞いた話をニックス達にそっくりそのまま伝える。
「クリスタルの力を阻害・・・？」
「おいおい・・・クリスタルの力を阻害って帝国の技術力はどうなっているんだ？」
「・・・・正気じゃないな。」「なんか・・・・やばそうだなあ。」

ノクトの話に驚く一同。
ノクト自身もジグタナス要塞で王の力を封じられていなければ信じられなかったであろう。
だが事実だ。
そんな中、いち早く冷静になったニックスはその情報源が気になった。
「・・・・そんな情報を誰から聞いたんで？」
「帝国宰相アーデン・イズニアから直接聞いた。流れであいつと戦う雰囲気になったけど今、あいつと戦っても１００％勝てねえのわかってたから戦わずに済むよう挑発したらあっさり引いてくれた。しょーじき、あいつと戦闘にならず命拾いしたわ。」
「あの帝国宰相のアーデン・イズニアから？それよりもあの宰相は腕が立つのか？」
情報源の人物に驚く一同だったが好戦的な性格の持ち主であるエクレール・ファロンはその後のノクトの話に興味が沸いたらしくアーデンの実力について聞いてきた。
「まーな。俺が知る限りでは最強だな。現状で世界最強って言われてもおかしくねえ実力を隠してる。」
ノクトの知る限りではアーデンほど実力を持った人物など見たことも聞いたこともない。
同じ王家の力を有しその身にシガイの力を宿し幾星霜の月日も王家への復讐だけを望み生きてきたあの男を最強と言わずにはおけないだろう。
ノクトがそんな考えに浸っていた時、魔導船内に鈍い砲撃音が響き渡る。
「・・・・・王城が!!」
ルーナの声で我に返り、急いで王城を見る。
そこには帝国軍の魔導船団が王城、クリスタルの間を砲撃し攻撃する光景が見えた。
「王子の言う通り、帝国の連中、直接クリスタルを取りに来てるようだな・・・・」

「ああ・・・だけどクリスタルのことは気にすんな。後々、取り返せるから。今は式典会場の議場に行くぞ。命は失ったら取り返せないからな。・・・それに後悔したくねぇから・・・」
ノクトはクリスタルよりも人命を優先した。
前世で大切な人を多く失った経験からノクトは失うことに対して一種の強迫観念にも似た思いを抱いている。
「・・・そう・・・ですね。わかりました。」
「まあ、そうだな。んじゃできる限り議場に急ぎますか。」
クリスタルよりレギスらの無事を確認する言うノクトの意見に同意したルナフレーナや王の剣の隊員らは議場へと向かうことにした。

時は遡り
王城
ノクトと別れたグラディオはクリスタルの間へと急ぎ階段を登る。
「ノクトのやつ・・・無理してねえだろうな・・・・っと見えてきたな。」
階段を登り切りクリスタルの間に続く通路に勢い良く飛び出すとプロンプトらがこちらに銃を向けて来る。いきなり飛び出したら敵と誤認してもおかしくない。むしろ身構えるのは当然のことだ。
「撃つな撃つな。プロンプト、俺だ。グラディオだ。」
「なんだーグラディオかー帝国兵かと思ったよ。」
味方と分かり銃を下すプロンプトや王兵たち。
そんな彼らを一瞥しイグニスが話してくる。
「ノクトはどうしたグラディオ。それにこの光はなんだ?」
「ノクトは、帝国の宰相の相手をしてる。・・・で、ノクティス王子からここにいる全員に伝達だ!!この光はクリスタルの力を阻害するもので、じきに第二魔法障壁が破られ帝国の魔導船の艦隊が来る!!クリスタルの死守を辞めて今すぐ調印式会場に行けとな!!」
次の瞬間、城内に第二魔法障壁が砕ける音が響き渡る。
「・・・どうやら第二魔法障壁が崩壊し始めたようだな。グラディオの話が事実ならここは危険だ。今すぐこの場を離れよう。」
「せっかく守っていたクリスタルを諦めちゃうの!?」

まだ諦めきれていないプロンプトにグラディオが脅しをかける。
「魔導船の砲撃で死にたいのか？プロンプト？つまりはそういうことだ。諦めろ。」
「うっ・・・・」
「よし全員行くぞ!!」
プロンプトを無理やり納得させた後、グラディオら三人と王兵十数名は議場へと急ぐ。

和平式典会場
魔法障壁が崩壊して一色触発の状態のところに魔導兵が侵入（ダイブ）して来たところから。
「これは!!魔導兵か!?」
「フン・・・ようやくか・・・アーデンめ時間をかけよって・・・まあ良い。・・・撃て。」
このくだらない茶番に飽き飽きしていたニフルハイム帝国皇帝イドラは魔導兵に命じる。
魔導兵がルシス王国政府高官を射殺しようとしたとき、別の場所からの複数の銃声が響き渡り魔導兵が怯んだ。
銃撃で魔導兵が怯んだところに魔導兵の頭部に何者かが投擲したダガーが突き刺さる。
「オラァァァァァァ!!!!」
さらにそんな魔導兵達を何者かが大剣で切り飛ばす。
「グラディオラス!?」
魔導兵を切った人物を見てクレイラスは叫ぶ。
「よかった!!間に合ったー!!」「国王陛下!!ご無事ですか!!」
「親父!!まだくたばって無い様だな。へっ・・・・安心したぜ。」
グラディオの後に遅れてプロンプトやイグニス、王兵らが議場に入ってくる。
背後の声を聴きながらグラディオは父親であるクレイラスを見て内心胸をなでおろした。
「お前たちはノクティスの護衛の・・・」

「グラディオラス!!お前達が何故ここにいるのだ!?ノクティス王子の護衛はどうしたのだ!?」
本来ここにはいないグラディオらの救援にレギスやクレイラスは困惑する。
ノクトらにはこの和平調印式については伏せており何も知らないはずなのだ。
なのにグラディオラス達、ノクトの護衛が何故この場に・・・・？
「ほうほう・・・王子の護衛・・・か。第一王子もこの王城にいるなら丁度良い。ルナフレーナもろとも殺してくれよう・・・」
クレイラス達の発言を聞いたイドラは笑みを浮かべながら冷酷にも言い放つ。
皇帝が言い終えるとともに議場に新たな乱入者が窓から飛び込んできた。
全身を鎧で覆い深紅の大剣を持つ人物・・・・
ニフルハイム帝国　軍事部門統括　グラウカ将軍
「丁度良いところに来たな。この城内に第一王子もいるそうだ。後の些事は任せたぞ。グラウカ。」
「・・・御意」
グラウカはレギスを睨みつつ答える。
イドラはグラウカの返答に満足したのか頷いた後、レイヴスら家臣たちを連れ議場を後にする。
「グラウカ将軍・・・・・!!」
「ルシス王国国王・・・レギス。貴様は私自らが死をくれてやる。」
グラウカが大剣を構える。
それに呼応してクレイラスたち家臣は国王レギスを囲む形で陣形を構築する。
「レギス。此処は私が。」
「いや良いクレイラス。これは私の戦争だ。」
自分が起こした戦いなのだと言い、彼らを押しのけてレギスが前に出る。
しかしながらそれを認める家臣は誰もいなかった。

「王は魔力の源。倒れられては我々は力を失います。共に戦いましょうぞ。」
「・・・・お前達・・・わかった・・・認めよう」
「国王陛下!!我々も助力いたします!!」
家臣たちに続きイグニスたちも戦闘に助力すると言ってくる。
だがレギスにはどうしても聞かなくてはならないことがあった。
「イグニスよ・・・ノクトはノクティスは・・・今何処にいる?」
「陛下。ノクトは必ず議場に来ます。しばしの辛抱を。」
ノクトの居場所を知らないイグニス達だがノクトなら必ずやこの議場に来るという確信があった。
「貴様ら雑兵の相手はこいつらで充分。私の相手はレギス・・・貴様ただ一人。」
グラウカはそう言いのけた後、剣や斧などを持った強化魔導兵が複数体、議場へ突入してくる。
魔導兵は起動したのち家臣たちやプロンプトたちを、グラウカはクレイラスとレギスを相手取る形となり今、議場での戦端が開かれた。

魔導兵たちがグラディオたちや家臣たちに突撃してくる。
プロンプトや王兵がそれを阻止すべく銃撃を行うが魔導兵らは銃撃に怯みこそするものの気にせず突っ込んでくる。そこをイグニスが魔導兵の関節を狙いダガーを投擲する。
それでも近くまで接近してきた先頭集団に対し第一撃を加えるのはグラディオ。
テンペストで複数の魔導兵を巻き込みながら攻撃し魔導兵を吹き飛ばす。
家臣たちも各々の武器を召喚し魔導兵たちの迎撃にあたり戦闘が始まった。
家臣やグラディオたちの戦闘を横目で見ながらもレギスとクレイラスはグラウカと対峙する。
レギスの横に並んだクレイラスが剣を構え言う。
「肩を並べて戦うなど久しぶりだ」

「そうだな」
「二人で行くぞ!!レギス!!」
直後、グラウカが驚異的な速さで突撃してくる。
グラウカの突進をレギスはサンダーで迎撃。
魔法が直撃し速度が鈍ったところでクレイラスが前に出てグラウカの大剣を受け止める。
だがその程度で止まるグラウカではなく空いた左手でクレイラスの腹を殴り、掴んで机に放り投げレギスへと再度突撃する。
レギスの目前に来たグラウカは大剣を振り下ろすも、レギスもファントムソードを展開しグラウカの大剣を受け止める・・・が力が衰えてきているため押され始める。
「国王陛下!!」
王兵の一人がレギスの危機に気が付きグラウカに銃撃を行うが銃弾は堅固な鎧に阻まれ通らず、その隙に迫っていた強化魔導兵に切られ絶命する。
「お前たちは自分たちのことに専念しろ!!」
態勢を整えたクレイラスは王兵やイグニスたちにそう号令し背後からグラウカに切り掛かる。
だがそれはすでに読まれており右手で殴られ、再度左手で掴まれ今度はレギスに向かい勢いよく投げられファントムソードを砕きながら議場の壁に叩きつけられる。
投げられる際に落とした、クレイラスの剣をグラウカは拾いクレイラスへと投げつけようとする。
そこへ・・・・
「親父ィ!!」
一連の戦闘を魔導兵を相手しながら見ていたグラディオが父クレイラスを守るべくグラウカへと切り掛かる。
だがグラディオの斬撃は簡単にを回避されグラウカが再び剣を投げようと腕を振りかぶり投擲する瞬間、一発の銃弾が右腕に命中し手甲を貫通する。
プロンプトの特殊攻撃、ペネレイトだ。

「ナイスだ!!プロンプト!!」
「その行動・・・・見えてるって!!」
プロンプトの銃撃で手元が狂った剣は本来、心臓を貫くはずだった体の中心から逸れてクレイラスの右肩へと突き刺さる。
「ぐゥ・・・!!」
「クレイラス!!」
右腕を撃たれたグラウカは傷をもろともせず近くにいたグラディオを蹴り飛ばして排除しそのままレギスへ切り掛かる。
切られる寸前にプロテスを展開し辛うじて斬撃を防ぐレギス。
「クリスタルを奪い。この上貴様らはこれ以上何を望む・・・!!」
レギスの問いに答えず再度切り掛かりプロテスを破ったグラウカは彼の左腕を掴み光耀の指輪を引き抜き、レギスを引き倒した上で背中から切り付けた。
「陛下!!」
王兵たちの指揮を執っていたイグニスが叫ぶ。
背中を切られ膝をつくレギスの横を光耀の指輪が床に転がり落ちる。
グラウカはレギスを見ながらも光耀の指輪の下へ歩み寄ろうとした・・・その時だった。
突如、グラウカの目の前に剣が飛んできたのだ。
グラウカが反応し剣を払おうとした次の瞬間、シフトの転移現象が起きノクトが現れ、シフトブレイクを行いグラウカを突き飛ばした。
「悪い!!待たせたな、親父!!」

# 4章「王子の初陣」

「悪い!!待たせたな、親父!!」
その言葉と共に現れたノクトはレギスを背にしてグラウカと相対する。
通路からルナフレーナやニックスら王の剣隊員たちが駆け付ける。
「陛下!!」
「レギス様!!ひどい怪我を・・・・今すぐ治癒を!!
「いや良い。ルナフレーナ。それよりも・・・指輪を・・・」
レギスはルナフレーナが治癒を施そうとするのを止めさせ、光耀の指輪を取るように伝える。
ノクトは後ろのやり取りを聞きつつもグラウカに対し意識を向ける。
「アンタが二フルハイム帝国将軍のグラウカか。」
「・・・・如何にも。・・・私が帝国軍軍事部門統括。グラウカだ。王に守られ何も知らぬ非力な第一王子よ。」
グラウカはノクティスに関して、つい昨日ルナフレーナとの結婚式に向かうために王都を出て行ったとしか知らない。
先程の一撃はスピードはあったがそれだけだ。パワーを伴っておらずこのグラウカに通用するようなものではない。
「先の不意打ちはなかなかのものだったが・・・・それだけだ。」
「そうかい・・・ならこいつは・・・・どうだ!?」
ノクトは伏龍王の投剣を召喚し投擲し連続で修羅王の刃を召喚しグラウカの頭上にぶん投げシフトを発動させる。
弧を描きグラウカに向かう投剣にシフトする伏龍王の投剣を三枚連続投擲してから修羅王の刃にシフトし頭上からの一撃を狙う。
投剣でのシフトブレイクを警戒していたグラウカはノクトの行動に驚きつつも冷静に大剣を使い叩き落し、次の頭上からの一撃には大剣の腹で修羅王の刃を受け止めノクトを弾き飛ばし壁へと叩きつける。
「グ・・・・っクソ!!」

「小細工を労しても無駄だ。如何様な力を持っていたとしても貴様ではこのグラウカには敵うまい!!」
壁に叩きつけられ全身に痛みが襲うがノクトは冷静であった。
修羅王の刃の一撃を受け止められたということはや夜叉王の刀剣や覇王の大剣といった武器での攻撃は有効でなのだろう。
だが、その一撃をグラウカに入れるのは至難の業だ。
切り札のファントムソード全展開も先のタコとの戦闘で使い、まだ力が溜まっていない。
だが・・・・・
「そうだな・・・俺だけではまだアンタには敵わないだろうよ。・・・・ただし俺だけならばなあ!!」
ノクトの発言の後、グラウカに向けて大剣が飛んでくる。
大剣を叩き落としたら今度はダガーが飛んできた。
それも叩き落してノクトを見ると・・・・
「おいおい・・・おっせえよどこで道草くってたんだよノクト。」
「ノクト、一人では無茶だ。俺たちがサポートに回る。無理はするな。」
「ノクトってばカッコつけすぎー。もう少し俺たちにも出番が必要だよねー。」
頼りになる親友たちが・・・・
「王城でここまでされると王の剣として名が泣くわなぁ。」
「ニックス、すでに私たち王の剣の名なんて地に墜ちているさ。」
「エクレールさん名誉挽回って行きましょうよ。」
「その通り!!だから俺が帝国将軍をマッハでハチの巣にしてやんよ!!」
ニックスやエクレール、ロッソとカニスといった王の剣の隊員たちがノクトの横に並ぶ。
自分には頼れる仲間がいる。独りでは決して無い。
「これがアンタとの差だグラウカ。力が足りないならそれを補ってでもアンタを・・・倒す!!」
父王の剣を召喚してグラウカに切り掛かるノクト。

それを返り討ちにしようとするグラウカに対しノクトが叫ぶ。
「プロンプト!!」
「任せて!!」
ノクトは指示を飛ばす。親友だからこそ通じ合う芸当だ。
ペネレイト
プロンプト一人ならば徹甲弾を放つだけの攻撃であるがノクトがいると話は異なる。
プロンプトの銃撃に警戒していたグラウカはプロンプトの攻撃を回避しノクトを切りつけようとしたところでノクトが消えたことに驚く。
消えたと思ったノクトはプロンプトの頭上にシフトしており、プロンプトから銃を受け取りグラウカに対して徹甲弾による銃撃を行ってきたのだ。
「・・・グ!!」
銃弾は左の頭部に命中し兜の一部を破壊する。
「ハチの巣になりなぁ!!」
「その隙は逃さない!!」
「動きを止める!!」
被弾した際に生じたその隙を王の隊員であるロッソやカニス、エクレールは見逃さない。
カニスは両手にハンドガンを持ち連射し、エクレールはサンダー、ロッソはファイアで攻撃を加える。
カニスの銃撃は厚い鎧に遮られ衝撃を与える以外あまり意味をなさなかったがサンダーやファイアは命中後に鎧の一部を溶融させた。
「イグニス!!マーク頼む!!やるぞ!!ニックス!!」
「了解だ。ノクト。」「了解したぜ。ノクト王子!!」
再度近接攻撃を仕掛けるノクトはイグニスにマークの指示を出しニックスには魔導船内で事前に打ち合わせていたコンビネーション技を使うよう指示する。
父王の剣で切り掛かるも大剣で防がれるがそれは予想の範囲だ。
ノクトはバク転とエアステップを使い距離を取りダガーを召喚し

投げる。
「遊びはこれまで!!これで終わりだ!!第一王子!!」
驚異的な速さで追撃しグラウカは勝利を確信しつつノクトを大剣で切り捨てた・・・・が
「残念・・・デコイだよ!!」
ノクトはダガーにシフトしておりグラウカが切ったのはシフトデコイだった。
そこにグラウカ将軍を挟んで対面にいたニックスが走りながらノクトに向かいククリを投げる。同様にノクトもダガーをニックスに投げつける。
さらにはイグニスが四本のダガーをグラウカに投擲しうち一本を先程の魔法による攻撃で溶融した部位に突き立てる。
「無駄なあがきを!!」
グラウカはイグニスのダガーを叩き落しノクトに向かう。
次の瞬間、シフトでノクトとニックスの位置が入れ替わる。
「これでも喰らいな!!」
ニックスの手にはファイアの魔法が用意されておりグラウカに火球を投げつけ炸裂させる。
そしてグラウカの背後にシフトしたノクトは覇王の大剣を召喚して背後から飛び掛かり切り付ける。
「・・・ガハっ!!」
クロスシフト
シフト能力を十全に使えるニックスとノクトだからこそ使えたコンビネーション技である。
互いに位置を変えて不意打ちによる攻撃。初見での対処は難しいはずだ
さらに先程のイグニスのマークがかく乱に役立っている。
「まだだ!!」
ノクトは追撃の手は緩めない。
兜に対してエンジンブレードでシフトブレイクを行い鎧に突き刺さったダガーにシフトし鎧を引き裂いた。

元々先の銃撃とファイアの攻撃で破損していた兜がエンジンブレードの一撃で割れグラウカを覆っていた兜の半分が崩れ落ち素顔が明らかになる。
そして、一部の者たちの呼吸が止まった。
「ド・・・・ドラッドー・・・・将軍?」
「ドラッドー・・・・どうしてお前が・・・・」

ロッソとレギスが呆然と呟く。
「ここまで・・・・やられるのは・・・・予想外だな・・・・」
ドラッドーはゆったりとあたりを見回しながら言い放つ。
「おいおいおい。これは・・・・どういうことだよ!!なんで国を守る武官のアンタが帝国の軍事部門統括やってんだよ!!」
「まさか、王の剣の裏切りはあんたの指示でしたとはねえ・・・・」
訳がわからないノクトは叫び、事情を察したニックスは魔導船での出来事を振り返る。
「裏切り?裏切ったのはレギスだろう?そこにいる第一王子かわいさに俺達の故郷を明け渡した売国奴だ。だから俺は帝国と取引したのさ。クリスタルとルシス王家の命、神凪の命を奪えば故郷を解放してくれる・・・・とな。お前達も来い!!そして故郷を解放しよう!!」
ニックスの言葉を受け鼻で笑いながら裏切り者はレギスだと言い張るドラッドー。さらにはニックス・エクレール・ロッソ・カニスらに離反するようにまで言ってくる。
「悪いが帝国のしたことまで許す気にはならねえし、そんな連中に組したいとも思わんね。」
「ニックスに同意だ。私もインソムニアに妹がいる。妹を見捨ててお前につきたいとは思わん!!」
「お断りしますね。着いていったところ裏切られて殺される結末しか見えないですし。」
「俺は王の剣だ!!今更裏切れっかよ!!」
王の剣の隊員たち各々がドラッドーの誘いを拒絶する。

「そうか・・・残念だ・・・お前達・・やれ・・」
彼らの発言に至極残念だと首を振りつつ発言する。
ドラッドーの発言と共に議場に複数の銃声が鳴り響く。
銃撃はノクトや王の剣隊員、生き残った王兵達へと降り注ぐ。
銃弾が到達する寸前にレギス達とニックスらは無事だったが・・・・
ノクトは脇腹に銃撃を受ける。
「グァッ!!」「ガハっ・・!!」
「いやあ将軍危ないところでしたねぇ。」
ノクトたちを撃った下手人たちが議場に入ってくる。
下手人は副隊長ルーチェを含む王の剣の隊員十数名と魔導兵たちであった。
「ルーチェ・・トレッドにアクシス・・・ベラム・・・お前たちまで!!」
隊長並びに副隊長などが裏切っていることにエクレールは憤慨する。
ニックスに至っては「おいおい嘘だろ?」と呆然としている。
「・・・テメエらは・・・・・・ぜってー・・・・・許さねえ・・・・・」
「ノクティス様!!」
重傷を負い崩れ落ちるノクトを放っておけずルナフレーナが駆け寄り介抱する。
「これが婚約者同士のあるべき姿。いやあ実にいいものですねえ。それを引き裂くのはもっと面白そうだ・・・・・。」
「形勢逆転だな。さあ光耀の指輪を渡してもらおうかルナフレーナ。さすればお前の命だけは考えてやってもよいぞ。ただしその後の身の保証はしかねるがな。」
下種な顔に歪みあざ笑うルーチェと勝ちを確信したドラッドーが言い放つ。
だがルナフレーナはそれを拒絶する。
「あなたたちにこの指輪は渡しません。この指輪は、クリスタルに選ばれた者がつけるもの・・・・誇り無き裏切り者に渡すものなどありません!!」
「なるほど・・・死を選ぶか・・・ならそうしてやろう。・・・・ルー

チェ、やれ。」
「ルナフレーナ様!!」
ルーチェがルナフレーナに対してククリを投げつけシフトし襲いかかる。
レギスや家臣、ニックスらが叫ぶ。
そして議場に新たに一つの赤い鮮血が舞った。

「・・・・・・え・・・・・・?」
「ば・・・・・ば・・・・か・・・・な・・・・・」

そこにはルーチェの体を逆鉾が貫く光景と呆然と逆鉾を持つルナフレーナの姿があった。
これはノクトが魔導船内でルナフレーナに念のためと武器召喚の力を与えており、
さらには己のファントムソードの一つである神凪の逆鉾を自衛のためにと渡していたのだ。
今回、威嚇のつもりで逆鉾を召喚し構えたつもりが武器召喚に驚くもシフトの勢いを殺せなかったルーチェが自ら逆鉾に刺さった形である。
多量の鮮血が飛び散りルーチェは絶命する。
もちろん直接人を傷つけるのも殺すのも初めてであるルナフレーナにとって覚悟はあったとしてもその衝撃は計り知れないものである。
ノクトは腹部の痛みに耐えながらも起き上がりルーナを斯き抱く。
「ノクティス様・・・・・わ・・・・わた・・・・し・・・・」
「大丈夫・・・ルーナ・・・大丈夫だから・・・こんな思いをさせて・・・ゴメン・・・だから・・・終わらせるから・・・指輪を・・・俺に渡してほしい・・・」
血まみれの顔で今にも泣きそうなルーナから指輪を受け取り、ノクトは叫ぶ。
「誰でもいい!!少し時間を稼いでくれ!!」

「そうはさせるか!!」
ノクトの意図に気づいたドラッドーが移動しようとしたところに銃弾の雨が降り注ぐ。
カニスとプロンプトが銃を二丁持ち撃ちまくりエクレールやレギスたちがサンダーやファイアなどを放つ。生き残った王兵たちも銃撃してくる。
鎧の破損が著しいドラッドーはトレッドが作り出したプロテスに身を隠す。
だが帝国側も負けじと銃での応戦を始め、一部隊員はククリを投げシフトを行い近接戦を仕掛ける。
その間にノクトはルナフレーナを庇いながら光耀の指輪を付け・・・・・そしてすべての時が止まった。

# 5章「うつろわざる王」

「ホウ・・・・未熟ナ身デ指輪ヲ付ケルカ・・・・」
「此度ノ人物ガ聖石ニ選バレシ王カ・・・・」
「チカラノ継承モ啓示モ行ワズニコノ指輪ヲ付ケル意味・・・貴様モ知ッテイヨウ・・・」
　ノクトの周りを歴代の王たちが囲む。
「シテ何ユエ指輪ヲ付ケタ・・・・聖石ニ選バレシ王ヨ・・・・」
　返答する言葉が決まっていたノクトは叫ぶ。
「歴代の王よ!!アンタらが持つその力を貸せ!!このふざけた戦いを終わらせるために!!」
「・・・如何ニ聖石ニ選バレシ王デアロウトモ我ラニ命令スルコトナド許サレナイ。」
「ソノ身・・・滅ボサレタイカ・・・小僧・・・・・・・・・!?」
　ノクトの言い草に歴代の王は憤るが直後・・・ノクトの内から発せられる自らの力の残滓を感じ取り困惑する。
「貴様カラ発セラレルソノチカラノ残滓・・・・ソレハマサカ・・・・!!」
「気づくのが遅いんだよ。そうだ、おれはすでに一度使命を果たしている!!だから・・・力を貸しやがれ!!」
　光耀の指輪を付けた時、ノクトは自身と指輪から微かに溢れ出る力を感じ取り気づいていた。
　この力はアーデンを滅ぼした時に発していたものと同じであるということに・・・
　そして指輪の力はその身に王らの一撃を受けた後に、闇を消し去るために発しようとしていたものと同質であることに。
「ソウカ・・・ソナタハ、世界ガ変ワッテモウツロワザル真ノ王デアッタ・・・カ・・・・」
「今ノソナタノ姿ハコノ世界デノ姿、コノママデハ魂ト肉体ガ拒絶ヲ起コシ・・・世界ヲ守ルコトナクオ前ハ消エ去リ、世界ハ闇ニ包マレルデアロウ。」

「何だと!?」
この世界でも生きていけないことを告げる歴代の王達。
その事実にノクトは驚く。
「ダガ、前ノ世界ノソナタノ肉体デアレバ魂トノ拒絶ハ起コラズコノ世界デモ生キテイクコトガ出来ルデアロウ。・・・ソノ為ニハ対価ガ必要ダ。」
「・・・・・上等じゃねえか。対価はなんだ?」
ノクトはこの世界に生きていく為の対価についての説明を要求する。
迷いのないノクトの返答に満足したのか他の王たちが対価について語り始める。
「ウツロワザル真ノ王ヨ・・・・・ソナタニハ、モウ一度我ラノ剣ヲ受ケテモラオウ。」
「今ノ肉体ノ死ヲ持ッテソナタノ真ノ肉体ヲ、コノ世界ニ呼ビ起コソウゾ。」
「ダガ今ハ要ラヌ。此度ノ戦ハ我ラガ助力シヨウ。世界ヲ闇カラ救ッタコトニ対スル我ラノ計ライダ、真ノ王ヨ。コノ戦ガ終ワリ次第、王ノ座ニテ払ッテモラオウ。」
「ソレニヨリ、使命ヲ果タシタ王ガ帰還ガ為サレ、光耀ノ指輪ハ真ナル覚醒ヲ始メヨウ。」
「ダガ、指輪ノ覚醒ハ不十分・・・真ノ覚醒マデハソナタノ姿ハコノ世界ト元イタ世界ノ姿トノ境界ガ曖昧トナル。真ノ覚醒ガ無ケレバイズレ世界カラ弾ジキ出サレヨウ。指輪ノ真ナル覚醒を促ス為ニハ神凪と再ビ世界ヲ巡リ六神の啓示ヲ再度受ケ、クリスタルニ触レヨ。」
「サスレバ、ソナタハコノ世界ニ留マレルコトガ出来、世界ハ闇ニ包マレルコト無ク平穏ヲ取リ戻スダロウ・・・・」
そう歴代の王たちが言い終える。
それを受けノクトは己を手を見つめ顔を歪ませながら言う。
「今、俺がこの時間軸にいること自体が奇跡だ。以前は色んなもんを失ってきた。ルーナや親父達を、だ・・・・玉座でのあれを繰り返して前の世界の肉体を呼び起こす?上等じゃねーか。支払ってやろう

じゃねーの。それでルーナやこの世界が守れて俺が生きてけんのなら喜んで支払ってやるよ!!」
そしてノクトは顔を上げ笑みを浮かべて言い放つ。

「契約成立だ。」

ノクトの宣言と共に歴代のルシス王が消え・・・
そして時間は動き出す。

１７時　王城　議場

銃弾や魔法が飛び交う戦場の中でそれは突如起こった。
指輪が光ったと思ったらすさまじい光が溢れ出し光がノクトとルナフレーナを包み込んだのだ。
「ルーナ・・・・ありがとな。・・・・もう大丈夫だ。」
「・・・・ノクティス・・・・様?」「ノ・・・ノクト・・・・?」
事態についていけないルナフレーナやプロンプトが困惑した声を上げる。
そんな彼らを置いてノクトはルーナの頬を指で優しくなぞりながら続ける。
「終わらせるって言ったろ?それに怪我も、もう大丈夫だルーナ。」
先程まであった腹部の銃創に光が集まり傷口が閉じていく。光の中でノクトは自身の内に眠る力が満たされていくのが分かった。
そして光が霧散していく・・・・・・
「ノクティス・・・そなたは・・・・そなたは何をしたのだ・・・・」
「安心しろ親父・・・俺はまだ何もしちゃいねえよ。ただ、歴代のルシスの王様達がな・・・俺に力を貸したいんだとよ。だからルーナ・・・

悪いけど、その逆鉾返してもらうな？」
ノクトはレギスの問いに答えつつ床に落ち血に濡れる神凪の逆鉾を自身の内に回収し、立ち上がる。
そしてドラッドーと向き合う。
「何の真似だ？ノクティス王子。」
魔導兵や裏切った隊員らが四方からノクトに銃口を合わせる。
そんな状況なのだがノクトはドラッドーの問いを無視して続ける。
「来い!!王の力よ!!」
ファントムソード全展開
歴代のルシス王の助力を得て今一度使えるようになった今のノクトの切り札である。
ノクトは魔導兵ら帝国軍が引き金を引くのよりも早く、近くの魔導兵にシフトで近づき賢王の剣で切り捨てる。
この時、別の魔導兵と裏切り者の王の剣隊員の頭上からはファントムソードが降り注ぎ同時に彼らを屠る。
一瞬で三名やられた帝国軍は事態が掴めず狼狽する。ただ一人を除いて。
狼狽する帝国兵や裏切り者の王の剣隊員を他所にドラッドーは猛スピードでノクトに迫り切り掛かるも連続シフトで移動するノクトには当たらない。
「っ!!・・・・・なんだ!!・・・・・なんなのだこの力は!!」
ドラッドーが幾度攻撃しようがその攻撃は当たらない。
何度か手ごたえはあったもののノクトの猛攻に変化はない。
それどころか攻撃の度に反撃を喰らい鎧の破損が酷くなる。
さらには頭上からは武器が降り注いでくるのだ。
ドラッドーは武器の雨を回避しつつも辺りを見回す。

もはや戦闘ですらなかった。

まだノクトの猛攻に太刀打ちが出来ているこちら側の王の剣隊員もいるが魔導兵は何もできず次々と屠られていく。

一方的な殲滅である。
その事実に身を震わせるドラッドーは即座に思考を切り替え、ノクトではなく少し離れたところで呆然とこの戦闘を見ているルナフレーナに目標を変え突進する。
「っっ!!・・・・させるかよ!!」
ノクトが瞬時にドラッドーの目の前に現れる。
だが、ドラッドーはこれが狙いだった。
正攻法での勝機は現状の体力や装備の破損など複数の要因から考えて無理だと悟った。
ならば、ルナフレーナを狙えば先程の経緯からノクティスはルナフレーナを守りに自分の前に現れるだろうと踏んでいのだ。
そしてそれは正しかった。
「かかったな!!」
ドラッドーが右手の大剣で渾身の突きをノクトに放つ。だが・・・・

「・・・・・・グぁ!?」

右腕に激痛が走った次の瞬間にはドラッドーの右腕と大剣が宙を舞い鮮血が飛び散る。
ノクトがこちらよりも早く父王の剣で右腕を大剣ごと切り飛ばしたのだ。
激痛に襲われながらもドラッドーは後方に飛び、ノクトから距離を取る。
ドラットーが離れると共にノクトの周囲を回っていたファントムソードが砕け消失する。
ドラッドーは右肩を抑え、肩で息をしながらノクトに言い募る。
「ノクティス王子・・・・お前が・・・・何をしようと・・・・・全て無駄だ!!今、この場で・・・・我らを倒そうとも・・・・帝国の増援が来る!!・・・・それに間もなく夜だ。・・・・王の剣の隊員諸君・・・・

お前達なら・・・・この意味・・・わかるだろう・・・・?」
「・・・・・・・・・・・!!」
ドラッドーは苦痛に顔を歪めながらも勝ちを誇った顔を崩さずこの後に何が訪れるのかを知っているであろうニックス達に問いかける。
夜・帝国の増援という単語にニックス達の脳裏にクレイン地方での一戦の記憶が蘇る。
夜とともに帝国が投入したあの巨大な生体兵器のことを・・・・・
「まさかあれをこのインソムニアに投入するつもりかい・・・アンタは今までいたこの街のことなんかどうでもいいって思ってるのか?」
「愚問・・・・だなニックス。私が・・・・取り返したいのは・・・・故郷だ。ここインソムニアが・・・・どうなろうが興味は・・・・無い。」
「っチ!!性根まで腐ってるってことかい。」
ニックスはドラッドーの返答に顔を歪め舌打ちをする。
第二魔法障壁無き今、帝国のシガイからインソムニアを守れるものはない。
詰みだ。ニックス達の中に諦めがわずかに頭をよぎる。
だが・・・・・・ノクトが前に進み出て宣言する。
「そんなこと俺がさせねえし。」
「・・・・フッ・・・・・この状況下で・・・・何を言うか王子。」
ドラッドーは口では強気に出る。
だがこの王子は何をしでかすか全くわからない。
それに現状はこちらが圧倒的に不利だ。撤退する必要がある。
アクシスにアイコンタクトで伝え時間を稼ぐ。
「第二魔法障壁は・・・・破られ、帝国が・・・創り上げた・・・戦術級巨大生体兵器・・・ダイヤウエポンには・・・・敵うまい・・・」
「だから、それも潰す。アンタらの思惑はすべてナシ・・・・だ!!」
「ここは引かせてもらうぞ・・・・アクシス!!」
ノクトが動く前にドラッドーの指示でアクシスはファイアを床に炸裂させる。

爆炎でドラッドーたちの姿が掻き消える。
「!!逃すかよ!!」
「ノクティスよ。いったんここは抑えるんだ。」
「親父!!」
追撃しようとするノクトをレギスが肩を掴み止めさせる。
苛立ちを抑えきれずノクトはレギスの腕を振り払い掴みかかる。
「親父は!!この状況を見逃せってのか!!街や王城が好き放題やられてるってのにアンタは・・・・!!」
「堪えるのだノクトよ。一時の感情に流されてはならぬ。すべてを失うぞ。」
「親父!!アンタが言うんじゃねーよ!!」
ノクトにとっては火に油を注ぐ行為であった。・・・・だが
「陛下の言うことにも一理ある。ここは抑えろノクト。」
「・・・イグニス!!」
「おいおいノクト。ルナフレーナ様の前でそんなみっともない真似すんのか?」
「グラディオまで・・・」
「ノクトは皆のことが大切だからねー。国のこともノクトなりに考えてるのはわかるけど突っ走り過ぎ。ちょっとは落ち着こうよ。」
「プロンプト・・・・」
親友らがノクトをなだめに来る。
腰に手を当て深呼吸し気持ちを落ち着かせる。
「はぁ・・・わかった・・・わかりましたよ。・・・・で、親父。この後のこと何か考えがあんのか?」
「光耀の指輪の力で・・・第一魔法障壁を発動させるのだ。これならば大型のシガイでも対処できよう」
「・・・却下だ。第一魔法障壁は市街地への被害が大きすぎる。民間人の避難も済んでいねえのにそんなことできるか!!」
レギスの考えに反発するノクト。
攻め込まれてからは何もかもが遅いのだ。
「ならば、ノクト、お前は帝国のシガイに市街地を蹂躙されたほうが良

いというのか!?」
「違げーし。ああ!!もうめんどくせーな。帝国は何とかするから親父は見てろっての!!とりあえず全員、王都が一望できる展望デッキに行くぞ。話はあとだ。」
「・・・・・・・・・良かろう。皆の者行くぞ。そこの君は悪いがクレイラスを支えてくれないか。」
「っは!!」
王兵の一人に戦闘の最中に救助されていたクレイラスを支えるようレギスが指示し、一同は展望デッキへと移動する。

18時　王城　展望デッキ
展望デッキからは平時は美しいインソムニアの夜の街並みが一望できる。
だが今は街の至る所から黒煙を上げ小型の魔導船が何隻も飛び交う痛々しい光景が広がる。
さらに外壁の向こうからは何かを吊り下げた魔導船が多数向かってくる。
「・・・・・あれだな。ニックスらに聞くけど、あのデカ物に見覚えは？」
「ああ・・・忘れるわけがない。私は後方で大魔法を行っていたからアレの全体像をよく覚えている。」
「アレを見間違えるわけねえな。ドラッドーが言うところのアレがダイヤウエポンってやつだ。」
「・・・・よく覚えてます。あの怪物が仲間を踏みつぶす光景が忘れられません。」
「・・・・・・・・あれは、マジでやばかったわ」
ニックス達はアレがダイヤウエポンだという。
まだ城壁外・・・・やるなら今しかない。
ノクトは覚悟を決める。
「全員下がってろ。」

「ノクティス様・・・?」
ノクトの声に緊張が混ざっているのをルナフレーナは勘づく。
右手を差し出し声を上げる。

「我、ノクティス・ルシス・チェラムが呼びかける!!契約に基づき我が声に応じよ!!剣神!!バハムート!!!!!」

「「!!!!???」」

ノクトの宣言の後・・・・・それは起きた。
ダイヤウエポンを直上から吊るす大型魔導船の一隻がいきなり落下しダイヤウエポンを巻き込みながら猛烈な勢いで海に落ちていき大きく水柱を上げながら海中に没し・・・閃光と共に轟音が展望デッキに響き渡った。
「何が起きた!?」「魔導船がダイヤウエポンを巻き込んで爆発したぞ!!」
「どういうことだ!!」
突然の出来事に驚くレギスたちに対し、冷静なノクト。
魔導船が墜落した場所より大きな水柱が立ち、何かが上空へと飛び出し猛烈なスピードでこちらに向かってくる
「あれは、まさか・・・・」
「あれは、六神の一柱、剣神・・・バハムート。」
「マジもんの神様を呼んだってのかい・・・・」
呆然と呟くレギスやルナフレーナにニックス。どこからかカメラの音が聞こえたが気にしないでおこう。
そんな中、ルナフレーナは‘声’を聞いた。
〔我・・・剣神バハムート・・・真の王の呼びかけに応じ助力に来た・・・〕
〔真の王・・・ノクティスよ・・・我と共に戦おうぞ・・・!!〕
「ああ悪いな・・・・力・・貸してくれ。」

剣神バハムートの呼びかけと共に再び光耀の指輪から光が溢れノクトの体を包み込む。
「ノクティス様!?」「ノクト!?」
そして光が霧散したとき、そこにはノクトの姿はなく仕立ての良い黒服を着こなしたレギスによく似た男が立っていた。
「・・・・え!?」「ノクト!!って・・・アレ?」
「あれは誰だ・・・」「ノクティス王子はいずこに・・・?」
混乱が広がる。
「ええと、そこのアンタ、悪いが誰だ?ノクトをどこにやった?回答によってはただじゃ済まさねえぞ。」
混乱しながらもグラディオは大剣を召喚し謎の男に聞く。
男は自分の姿を確認し始める。
「ん?ああ・・・なるほどな。ま、当然の反応・・・だな。今は説明している時間が惜しい。だが信じてくれ。俺がノクトだ。」
「・・・・・・ハア?」
笑みを浮かべ、自分がノクトだと言う男の返答にグラディオたちをさらに混乱する。
しかし、グラディオたちの驚愕に付き合う暇のないノクトは展望デッキの安全柵を乗り越え・・・・
「じゃあ・・・・行ってくる。」
「な・・・・・お・・・・おい!?待ちやが・・・・」
迷うことなく飛び降りた。

# 6章「代償」

王城から飛び降りたノクトに対し、バハムートもノクトの後を追いかけついてくる。
目の前に地面が迫る中、落下に焦る事無く冷静に己が内に眠る力を解放する。
「・・・・・集え。王の力よ!!」
ノクトの言葉と共に先程同様にファントムソードが全展開される・・・・が今回は状況が違った。
ファントムソード展開と同時にノクトにも光が集まると落下が止まり宙に浮く。
さらにとんでもないことをノクトは続ける。
ノクトの横を高速で通り過ぎるバハムートの体の一部にシフトで移動し掴んだのだ。
ノクトが掴まったところでバハムートは真下から向きを変え、インソムニアに侵入しようとする大型魔導船とダイヤウエポンの一団に向かい飛び去る。
進行ルート上にいた小型魔導船をその大剣で切り裂き破壊しながらバハムートは大型魔導船とダイヤウエポンに急速接近する。
こちらに接近してくるバハムートを撃墜しようと大型魔導船やダイヤウエポンが砲撃を行うが空を俊敏に駆けるバハムートにはかすりもしない。
魔導船が目と鼻の距離になった頃合いでノクトはバハムートから離れ宙を舞う。
「一緒にやるぞ。バハムート!!」
その言葉とを発するとともに魔導船に吊るされあまり身動きの取れない哀れなダイヤウエポンにノクトとバハムートがそれぞれ襲い掛かった。
ファントムソードを絨毯爆撃のように射出しダイヤウエポンを攻撃する。
刺さる事無く文字通り爆破されダメージを負うダイヤウエポンは

肩の砲門を開こうとするが・・・・・
「させるかよ!!」
ノクトが先回りしており砲門内部にシフトブレイクし内部をズタズタに切り刻み、これでもかと容赦なく剣の爆撃を浴びせる。
もがき苦しむダイヤウエポンの全身を王の武器で切り込み、爆撃していく。
ノクトは止めにとファントムソード全てを集結させダイヤウエポンの中心に叩き込む。ついでに直上の大型魔導船の動力部にもファントムソードを叩きこむ。
「これで一体・・・残りは・・・」
辺りを見回すとダイヤウエポンがあと十体前後いた。
だが、そのうちの二体はバハムートになます切りにされ、直後両断され胴体を貫かれ消滅していく光景があった。
帝国側も無抵抗でやられる訳がなく、王都城壁内部の森林地帯に次々とダイヤウエポンを投下しバハムートとノクトを迎え撃つ準備を整える。
地面に着地した複数のダイヤウエポンは両肩の砲口を開き、仲間を切り刻み撃破した敵に対して光弾を射出する。
が、その光弾をノクトはシフトで回避、バハムートに至っては大剣の一薙ぎで複数の光弾を纏めてかき消す。
「バハムート!!」
絨毯爆撃のような光弾を辛うじて回避したノクトはダイヤウエポンに攻撃を加えつつ、バハムートの名を叫ぶ。
ノクトの叫びに呼応するかのようにバハムートは上空遥か高く飛び上がり、背中の剣を展開。
インソムニア近辺に展開している全ての帝国軍大型魔導船、残りのダイヤウエポンに照準を合わせ己が持つ大剣を振り下ろした。
バハムート最大にして最強の攻撃。
アルテマソード

大剣の振り下ろしと共に展開していた剣が全て射出され、帝国軍とダイヤウエポンへ雨の様に剣が降り注ぐ。
回避運動が間に合うはずもなく、降り注ぐ剣に貫かれ轟音と共に爆散、または炎上し墜落していく数多くの大型魔導船。
数本の剣が脳天から突き刺さり沈黙し消滅していくダイヤウエポン。
わずか数十秒で戦力の大半を失うという帝国軍にとっては悪夢と呼べる光景がそこにはあった。
「やっぱスゲーわ。」
消滅していくダイヤウエポンを傍目に改めて六神の強さを実感するノクト。
だが気を緩める時でないため気を引き締め、こちらに向かってくるバハムートに対し行きと同様シフトし、しがみつく。
ダイヤウエポンを一掃したノクトらはルナフレーナらが待つ、王城へと空を駆ける。
王城　入り口前
バハムートとともにルナフレーナやグラディオらがいる王城上階に向かう。
途中でノクトはふと階下の広場に目をやった先に大勢の魔導兵が王城広場に集結しているのが目に飛び込んできた。
「バハムート。ここまでいいわ、助かった。」
そう言い。バハムートから離れる。直後、バハムートの声が響く。
〔うつろわざる真の王、ノクティス。其方の危機には我、剣神バハムート。力を貸すべく参上しよう。時の狭間にて眠る真の肉体を呼び起こすべく、残りの四神からの啓示を受けよ。そして・・・世界を真の闇から守るのだ。〕
バハムートは言い終えると王城を旋回しながら上空遥か彼方へと飛び上がっていった。
それを横目で見ながら王城入り口にエンジンブレードを投げシフトする。

魔導兵が王兵の守りを破り王城に殺到しようとするその時、それは起きた。
入り口付近にシフトによる転移現象が起き、一人の黒ずくめの男が立ちふさがったのだ。
そう、ノクトである。
ノクトは悠然と階段を下り、恐れることなく魔導兵達に近づく。
ノクトを敵と認識した魔導兵達は一斉に銃撃を行うも銃弾は見えない何かに阻まれ全く通じない。
「こっから先には誰一人行かせねえよ。」
ノクトは右手を差し出しエンジンブレードを召喚し魔導兵に投げつけシフトブレイクを行い貫く。
魔導兵を貫く周囲の魔導兵にファントムソードの雨を降らせつつ獅子王の双剣を召喚する。
双剣を召喚するとノクトは駆け出し前方の魔導兵を前進しつつ切り裂く。
今度は双剣を分離させて後方に飛びつつ投擲。
着地と同時にノクトは父王の剣を召喚し魔導兵の一体にシフトブレイクを叩き込む。振り向きざまに武器を覇王の大剣に持ち替え、周りにいた魔導兵を纏めて切り飛ばした。
「くれてやるよ!!」
懐からトウテツの牙を用いて精錬したサンダラのマジックボトルを取り出し投げつけ炸裂させ、別の方向にいた魔導兵たちには加減なしのファイアをお見舞いする。
マジックボトルを使用しない魔法は出力の加減が難しく扱いが難しいので普段は使用しないが今回は違う。
加減なしのファイアは人二人が入りそうな大きさの火球を形成し轟音と共に周囲にいた魔導兵を巻き込みながら爆発する。
爆風をもろともせず神凪の逆鉾を召喚し魔導兵へとシフトで移動しつつ突撃を行う。
「ハアッ!!」
神凪の逆鉾で魔導兵の一体を突き刺し、その魔導兵が持っていたマ

シンガンを奪い銃弾を周囲の魔導兵にばら撒く。
マシンガンを己の武器として手元から消しシフトですぐさま階段まで後退する。
残存する魔導兵の数体がノクトに対してロケットランチャーを使用しノクトの排除を試みる。
しかし、ノクトは回避する素振りを見せずにその場に立ち尽くし、ロケットが命中する。
ノクトがいた位置を中心に爆炎が立ち上るが、またしてもファントムソードが攻撃を遮りノクトは全くの無傷であった。
「・・・・・もう少しだな。」
再度、エンジンブレードを魔導兵に投げつけシフトブレイクし貫く。
シフトブレイクの勢いを利用し魔導兵の肩を掴んで飛び上がりエンジンブレードで別の魔導兵を切り伏せる。
右手から来る魔導兵三体には飛王の弓を召喚し三連射させ射る。
「これで最後!!」
修羅王の刃を投げつけ頭上から最後の魔導兵を叩き切りノクトは広場の魔導兵すべてを排除することに成功したのだった。
そしてノクトの姿が３０歳の姿から２０歳の時の姿へと戻る。

・・・・・・・・
王城入り口にまで戻ったノクトは周囲を見回し。
「・・・・俺らのために尽くしてくれて、ありがとうな。お前たちの死は無駄にしねえ。・・・・だから少し力を借りるわ。」
王城への侵入を防ぐために魔導兵と戦い散っていった王兵の遺体にへ近づくと光耀の指輪を向ける。
光耀の指輪が仄かに輝き、指輪を通じてノクトは王兵の遺体から何かを吸収し始める。
輝きが収まるとノクトは身を翻し、皆の待つ展望階へと向かうことにした。

王城　　展望階

「ノクティス!!」

「「「ノクト!!!!」」」

「「「「ノクティス様!!」」」」

展望階テラスに出ると親父やルーナ、イグニスにグラディオにプロンプト、親父の部下が駆け寄ってくるのが見えた。

「六神との共闘も見ててすごかったけど、下での戦闘もやばかったよー。あの姿といいあの力といい何したのさ?」

「・・・・この場を切り抜けるために神様から力を借りた。ま、色々代償は払わねえといけねえみたいだけどな。」

「代償?」

真っ先に絡んできたプロンプトと話しながらこの後しなければならないことを思い浮かべノクトはプロンプトの顔から眼を背ける。

「代償・・・・?ノクティス様、それは一体・・・」

「ああ・・えっと・・・・詳しいことは・・・・ルーナごめん。王の間で話す。」

「王の間で?ノクト王子、一体何を考えてるんですかねえ。軽くでいいから教えてくれませんかい。」

「今後の対策って言えばいいか?ニックス。時間がねぇしとりあえず全員王の間に行くぞ。」

本当のことを言えばルーナやニックスはもちろんこの場にいる全員が阻止してくるのは容易に想像できた。

ただでさえ皆、気が立っているのだ。そこで代償にほぼ死ぬも同然の対価を支払いに行きますなどこの場では到底言えない。

だからノクトは周囲を強引に説得してでも王の間に行く必要があった。

「ノクト、その打開策とは?」

「ノーコメント。イグニス。ここでは話せない。」

「ちょっとぐらいいじゃねえか。」

王城　　王の間

王の扉を開ける。
ノクトの感覚ではつい1日前まで10年後の王城で使命を果たし命を落とした場所なのだ。
色んな感情が胸の内を渦巻くが、手入れの入ったほぼ無傷のきれいな王の間を見るのは久々だった。
「ああ・・・そうか・・・あれはニックスだったんだな。」
「は？」
王の間に入って思い出した。
アーデンによって作られた人形のことを。
イドラ・エルダーキャプト、ルーナ、親父の三名まではわかったが残る一名の人形が衣服から王の剣の隊員であることはわかるのだが、それが誰なのか皆目見当がつかなかった。
だが逆行してきて、王の剣のメンバーと会ってようやくわかった。
あれはニックス・フリックを模した人形であったことを。
アーデンがどういう意図で配置したのかはもう今となっては不明ではあるが。
「ノクト王子。俺に何か用で？」
「いや・・・ちょっと考え事してた。悪い、独り言だから忘れてくれ。」
「はあ・・・？」
未来のことなど言えるはずもなく手を振り誤魔化す。
王の間に全員が入るとクレイラスやイグニスが王兵にエレベーターホールの警護をするよう指示を出しているのが聞こえた。
それに構わずノクトは玉座付近まで近づくと振り返りルナフレーナ達を見つめ声を張り上げる。
「皆はここで止まってよく聞いてくれ。・・・今から、先ほど言った代償について話す。」
光耀の指輪から光が溢れノクトとルナフレーナたちの間に不可視の壁が出現する。
「何のつもりだ!!ノクト!!」
「代償ってのはさ・・・まあ・・・そうだな・・・この世界における俺の寿命・・・ってとこか？」

「ノクト・・・・何を・・・・・言って・・・・?」
「馬鹿なことを言うなノクティス!!お前の使命は!!聖石に選ばれし王として世界を闇から救うことだろう!!」
　ノクトの言う「代償」に騒然となる一同に対しノクトは内心色んな感情が渦巻いてはいたがあくまでも冷静だった。
「まあ、その使命の行き先も結局のところ俺の命なんだけどな。」
「何だと!?」
　使命の内容をある程度知っているレギスやルナフレーナ以外から驚きの声が上がる。
「俺の使命ってのは六神からの啓示を受け王の力を集め、クリスタルの力を１０年・・・光耀の指輪に蓄え、後ろの玉座で人柱として歴代のルシス王に貫かれ死ぬことで・・・・闇が浄化され果たされる。まあ、親父もルーナも俺の使命がどんなもんかなんとなく知ってただろ?ま、それに今回は使命とはまた別の要件だし。」
「別・・・・・ですか?」
　大まかに自分の使命を説明しつつ今回の「代償」について説明しつつ玉座の階段を上る。
「まあ、使命に関してはバハムートから教えてもらったもんだから気にすんな。今回の代償は歴代のルシスの王様たち曰く俺の寿命の１０年を捧げることなんだとさ。あと、死ぬほど痛いらしいんだわ。」
「そんなのは断じて容認できぬ!!よせ、よさぬか!!ノクティス!!」
「すまねえ親父。これは俺も引けねえんだよ。」
　玉座に掛けたノクトは目を瞑ったあと、「以前」同様にと父王の剣を召喚し呼びかける。
「歴代のルシスの王よ!!集え!!」

　父王の剣を床に突き立てるとともに以前と同じく円を描くようにファントムソードが出現し歴代ルシス王の幻影が現れる。
「ウツロワザル真ノ王、ノクティス。ソナタノ呼ビ掛ケニ応ジ我ラココニ参上シタ。今コソ其方ノ肉体ヲ呼ビ戻ス時也。」

「時ヲ超エタソノ代償・・・・今、此処デ払ッテモラオウゾ。」
歴代のルシス王がそれぞれ己の武器を手に持つ。
前回と異なるのはルシス王が持つファントムソードが全て実体化しているということだ。
「デハ行クゾ!!」
賢王の剣を持つルシス王がノクトの胸に剣を突き立てる。
それを皮切りに各ルシス王がノクトの体に剣や槍などを次々に突き立てていく。
「ガアッ!!」
「グウッ!!」
「歴代のルシスの王よ。頼む。やめてくれ!!・・・頼む!!」
レギスの懇願に歴代のルシス王の一人が振り向き無情の一言を告げる。
「ナラヌ。真ノ王ノ覚悟ヲ踏ミニジルコトナドデキヌ。真ノ王ヲ育テタ父王ヨ、オ前ガ最後ノ一撃ヲ加エルコトデ真ノ王ノ帰還ト指輪ノ覚醒ガ為サレルデアロウ。」
「そんな・・・・そんなこと、私にはできませぬ!!」
「ナラバ、真ノ王ハ無意味ノ死ヲ遂ゲルコトニナロウ。父王ヨ、慈悲ハ時トシテ毒トナル。ヨクヨク考エルコトダ。」
ルシス王は言い切ると同時に夜叉王の刀剣を掲げノクトに突き立て姿が霧散する。
それと同時にレギスを招き入れるかのように障壁の一部が解ける。
レギスは不自由な足を懸命に動かしノクトの下に歩み寄る。
玉座に座るノクトの姿はさも磔に遭っている罪人のような姿を呈していた。
「・・・・ッ!!」
「親父・・・・あと・・・頼む・・・・わ・・」
全身を串刺しにされ息も絶え絶えな状態のノクトは朦朧とする意識の中、父レギスに介錯を頼む。
「ああ・・・・わかった・・・ッ。後は父に・・・任せろ・・・ッ!!」
震える手でレギスは父王の剣を召喚し構えたのち・・・・ノクトに

突き立てた。

# 7章「反応」

レギスがノクトの胸に剣を突き立てて間もなく変化は起きた。
右手の光耀の指輪が一際強く輝き閃光を放ちだす。
それは王の間だけでなくインソムニア、イオス全土を包み込んだ。

時は少し遡り
クリスタルを奪取して帝都に帰還している最中の大型魔導船団
それは突然突如として起きた。
レーダー状に映っていたインソムニアへ向かっていた味方の魔導船のアイコンが次々と消滅しまた別のモニターでとあるエネルギー波が検出され機器を操作していたオペレーターは目を見開く
「!? こ、これは!?」
「なーに。どうしたの？何かあった？」
魔導船のオペレーターの焦りを含んだ大声を聞きつけたアーデンが近寄る。
アーデンが来たのを確認したオペレーターはレーダーに映った事象を報告する。
「インソムニアの侵攻に当たっていた大型魔導船２５隻並びに・・・・ダイヤウエポン１３体の反応が消滅致しました!!インソムニア城塞周辺に氷神シヴァと同様のエネルギー波を観測!!宰相閣下これは!?」
「どーも、今回は予定通りには進まないなあ。やっぱり選ばれし王様ってやつは何しでかすかわからないんだから怖いねえ。それにしても、六神の一柱を召喚するとは。あの時、挑発に乗らず実力を確認しとくべきだった・・・・かな。」
肩をすくませつつノクトの存在について考えていたところに背後からニフルハイム帝国皇帝イドラの声が聞こえてきた。
「アーデン。何が起きた？」
「どーやら何者かの妨害により、インソムニア侵攻に想定外の損害が発生した模様ですね。先程のグラウカ将軍の敗走といいその想定外

を起こしてる人物はこちらの予定を悉く潰してくる。厄介極まりないですよ本当。」
　あえてノクトのことを伏せて答えるアーデン。
　そんな彼らを他所にさらなる異変が訪れる。
「なんだ?あの光は!?」
「こっちに来るぞ!!」
　艦橋が一気に騒がしくなる。
「今度は何?何なのさ一体?」
　オペレータたちの叫び声にブリッジ中央のモニターをのぞき込むアーデン。
　そこにはインソムニアの方角から押し寄せてくる強烈な閃光が映し出されていた。
「何・・・・・・ッ!?」
　時間にして十数秒、光はアーデンら大型魔導船を包み込み、そして何事もなかったかのように元に戻った。
「いったい何が起こった!?」
「ふ、不明です。ですが艦の機能には問題ありません・・・・・・!?」
　機器を操作し艦の状態を確認していたオペレーター達はレーダーや無線から次々と飛び込んでくる情報に驚愕する。
「ほ、報告いたします!!各艦に搭載していた大多数の旧型魔導兵が突如、機能を停止いたしました!!新型魔導兵の大半は無事との報告がありますが残った旧型魔導兵、新型魔導兵共に何かしらの異常が発生しているのか動作が緩慢な模様!!こ、これは一体!?」
「魔導兵の機能が停止しただと?アーデン、何が起きているかわかるか?・・・・・・アーデン?」
　返答がないことに気になったイドラがアーデンの方を向くとそこには額を押さえるアーデンの姿があった。
「アーデンどうした?」
「いえ・・・先ほどの光に少しやられたようです。あー時間が経てば治りますでしょう。・・・・あの光と魔導兵の機能停止との因果関係は現段階ではさっぱりわかりません。ですのでホルヘクス研究所に

いるヴァーサタイルに解析をさせましょう。先程の光を直視してしまい少々気分がすぐれないので私は一旦部屋に戻ることにします。陛下、何かあったらお呼びください。」
「・・・・そうか。お前の立案した此度の作戦、グラウカらの失敗もあり完璧とは言い難いがクリスタルの奪取とあの小賢しい魔法防壁の除去には成功した。ご苦労であったなアーデン。」
「お褒めいただき至極恐悦の極みでございます。陛下。」
帽子を取り優雅な一礼をするとともにデッキから退出するアーデン。
艦橋を離れ一人になったアーデンの顔にはすました顔はそこになく苦悶と憎悪に溢れた笑みを浮かべていた。
「やってくれたじゃないかぁ。まさか、六神の召喚のみならず、一部のプラモディウス変異体の浄化までやってのけるとは・・・・ね。どうやら舐めて相手してたのは王子でなく俺だったというわけか。ハハハ・・・・面白くなってきたじゃないかぁ。この借りは高くつくぞぉ。なあノクティス？」

王城　王の間

指輪から光が収まる。
玉座には閃光が発せられる前は剣や槍や槌などで串刺しにされ血まみれだったノクトがいたはずなのだがそこに力なく座るのは傷一つない、いつものノクトがいた。
「ノクティス!!」
レギスはノクトの下に駆け寄り脈を確認する。
首元の血管に触れると規則正しい脈動の感覚が手に伝わってくる。
生きていることにレギスは一先ずは安堵した。
そこにイグニスたちが駆け寄る。
「ノクティス、しっかりしろ!!ノクティス!!」
「陛下!!ノクトは無事なのですか!?」
「意識がないこと以外はわからぬ。あれだけの傷を負っていたのだ。

何があってもおかしくはない。」
　とりあえずは無事であるということに喜ぶ一同ではあったがノクトの状態が分からないという状況に不安を隠せない。
　そこにルナフレーナがノクトの許に近づき治癒を始める。
「ノクティス様なら必ず目を覚ます。それを待ちましょう。」
　その時、背後からこの場にいなかった友の叫び声が響き渡る。
「陛下!!ご無事で!?」
「コルか!?」
　王都で市民の避難誘導や魔導兵らとの戦闘を行っていたコルだがある状況の変化で部下に任せれるほどの余裕が出来たため一体の掃討と市民の避難誘導を部下に任せレギスの無事を確認しに駆け付けたのであった。
「陛下!!ご無事でしたか。先程の光で魔導兵が次々と機能を停止していったのでこちらで何かあったのかと思い。」
「それは恐らく陛下でなくノクティス王子の・・・執り行ったことによるものだ。」
「クレイラス!!その傷は!?それにノクティス王子が執り行ったとは?」
「詳しくはわからん。ノクティス王子ならば何か知っていてもおかしくはないが・・・・あの状態ではな。」
　ルナフレーナに介抱されるノクトを横目にクレイラスはため息をつく。
　和平調印式から怒涛の展開でありクレイラス自身も含めたこの場にいるほぼ全員が全ての状況を把握しきれていない。
　ましてやたった今駆け付けたコルには全く状況が掴めていないだろう。
「ノクティス王子のことはルナフレーナ様に一任しよう。コル、我々は今できることをするぞ。」
「ええわかっています。今為すべきことはインソムニアにいる帝国軍の排除と市民の安全の確保です。クレイラス。陛下のことは任せるぞ。」

「言われるまでもない。」
短い言葉を交わしコルは来た道を引き返す。己が為すべきことをするために。
対するクレイラスも王の間にいる王兵や政府高官らに城内の事態把握のための指示を飛ばす。
ニフルハイム帝国による調印式襲撃事件の幕引きを図るため、王都インソムニアは終夜、人が行き交っていた。

＊　＊　＊

撃事件の翌朝にはルシス王国国王レギス並びに神凪ルナフレーナの両名が会見を開きこと事の顛末の発表をするとともに和平調印と偽り王都奇襲作戦を計画・実行したニフルハイム帝国を非難。と同時にニフルハイム帝国との和平の破棄を宣言。
和平で執り行うはずだったルシス王国第一王子のノクティス・ルシス・チェラムと神凪ルナフレーナ・ノックス・フルーレの婚約はフィアンセであるルナフレーナ本人たっての願いにより和平調印の破棄に伴う婚約の破棄をすることはなかった。
また、今回の襲撃事件で六神の一柱である剣神を召喚し帝国によるインソムニアの被害拡大を防ぐとともに、事態の解決に尽力した立役者であるノクティスは深い傷を負い昏睡状態にあり、いつ目が覚めるのかは不明であるという発表もされ今回の事態を招いたレギスに対し多くの批判が集まった。
ニフルハイム帝国はルシス王国の会見に対し依然として沈黙を貫いておりルシス王国側の非難が半ば事実であることを印象付けたのだった。

会見の翌日
ニフルハイム帝国　帝都グラレア　軍施設とある会議室
円卓のテーブルに初老の将校を起点として約十名前後の将校が囲むように座していた。
「皆忙しい中、集まってくれて感謝する。私を含め参加者は十名足ら

ず・・・か。・・・わかってはいるがやはり人が少ないのは悲しいものだな。ではこれより緊急会合を行う。オーラン准将、議題を。」
初老の将校の言葉を皮切りに会合が開始される。
会合の議題は必然的に決まっているためか参加者の一部には不快な表情が伺える。
「わかりました。此度の会合は先日の和平調印式奇襲作戦で生じた影響についての会合です。皆さんも知っていますでしょうが奇襲作戦が終了間際に発生した謎の閃光、そのあとに起きた魔導兵の停止についての報告です。配布した資料をご確認ください。」
司会進行役を務めるオーランは参加者に手元の資料を見るよう促し、内容を読み上げていく。
王都奇襲作戦、ニフルハイムによる世界征服を企むグラウカを筆頭とした軍主流派とニフルハイム帝国皇帝イドラやアーデンら政府首脳陣によって計画実行された作戦である。
「お手元の資料にもあるように先日のインソムニア襲撃、占領に派遣された大型魔導船２７隻、移動基地１４隻、小型魔導船４０隻以上が六神の一柱である剣神バハムート並びに第一王子ノクティスらの反撃を受け大破・撃墜。並びにあの忌々しい大型戦術生物兵器であるダイヤウエポンも１３体全て撃破されました。また、そのあとに発生した閃光により原因不明ですがホルヘクス魔導研究所の発表によると、現在わが帝国の保有する魔導兵の三割が機能を停止、残った七割の魔導兵のうちの一割には機能不全を疑わせる症状が発生しており戦闘に出せる状態ではないという発表がされております。」
資料には投入された戦力、被害損失の総数、損失の内訳や魔導研究所の発表や国内外の反応などなど細かく記載されていた。
「こちらの戦果は？」
「はい。帝国の戦果と言えるものですがこちらが入手した情報によるとルシス王国が所持・管理していたクリスタルの奪取並びにルシス王国王都インソムニアを覆っていた魔法防壁の消失のみということだそうです。これが事実ならば損害に対して得られたものが極めて少ないと言える結果であると言えます。」

オーランの報告で静まり返る会議室に若き青年将校の一人が机を叩き参加者の視線が彼に集まる。
彼は参加者の中では一際若く、だが実力でのし上がってきた有力な佐官である。
「戦果以前にそもそも和平を隠れ蓑にした奇襲はデメリットが大きすぎたんだ!!アコルドやテネブラエなどの自治区が和平調印式奇襲作戦を見て黙っているはずがない!!」
「・・・・この作戦で生じたこちらの損害としては魔導兵の約四割が無力されたに等しい状態。近年増加傾向にあるシガイの討伐や治安維持に大きな影響を及ぼし帝国臣民の身をより危険にさらす羽目になっているではないか。これはグラウカ将軍をはじめとした進軍派や政府中枢の怠慢ではないのか?」
若い佐官の一人が忌々し気に吐き捨てもう一人の眼帯をした将校が上層部を静かに非難する。
「マキナ大佐、それにカトル准将。それは奇襲作戦の強行を止められなかった我々も同罪だ。もはや過ぎたことを気にしていても先には進まない。帝国臣民の為にも今後の起こり得る事態を予測し今、我々が打てる対策練るべきだ。」
「・・・・・・・・」
閣下と呼ばれる将校の言葉にマキナとカトルが押し黙り、頃合いを見計らったかのようにオーランが続ける。
「今回のような魔導兵の機能停止が今後も拡大し続けた場合、帝国は致命的な損害を被ることとなるでしょう。最悪、魔導兵全てが停止した時のことも想定して関係各機関と協議し対策の構築を図るべきです。」
「我々の取るべきスタンスはただ一つ。帝国臣民の安全ただそれのみ。臣民あっての帝国、臣民あっての我々なのだ。今は小さなことでも臣民の為に出来ることから進めるべきだろう。そのための我らだ。」
オーランに続いてそう初老の将校が締めくくると議題は今後の対策へと移っていき議論はその日の夜遅くまで続いた。

＊　＊　＊

アコルド　オルティシエ
首相官邸

「・・・・いいんですかい？ニフルハイム帝国は今、弱っている。動くには絶好のチャンスじゃないですかねえ。」
「面白いわね。いったい何の冗談かしら？」
執務室の窓際に立っていたカメリアは振り返る事無く返答する。
背後から響く声の主は自身がよく足を運ぶマーゴの店主、ウィスカルム・アルマのものだ。
「帝国が弱っている・・・・今の状況だけを見れば確かにそうね。十数年前の私なら今の状況を見たらそう考えてアコルド独立の為の活動を表面化させたでしょうね。」
「では？」
過去を振り返りつつ返答しカメリアはウィスカルム・アルマに向かって自身の考えを面と向かって述べ始めた。
「動かないわよ。このルシスの一件で帝国にダメージが入ったとしてもそれは一時的なもの。時間が経ち帝国が元に戻れば全てに劣るこちらが押しつぶされるだけ。仮にルシスと同盟を組んだとしても帝国が元に戻れば１５０年前の二の舞になるのは明白。だから現状は私たちが表立って動くことはないわね。」
「現状は・・・・ですか。アコルドが動くとすればルシス王国の動き次第ってことですかねえ。」
カメリアの返答は現状は動かない。ならばレギス率いるルシス王国の行動次第だとアルマは考え発言したが・・・・・
「違うわね。」
「はい？」
全てはルシス次第と思っていたアルマは即座に自身の考えを否定され困惑する。
カメリアはアルマの困惑を他所に自身のデスクへと戻り腕を組み毅然とアルマに告げる。

「ルシスの動きでなく、全ては第一王子の動きで決まるわ。」

＊　＊　＊

それから2日　ノクトが昏睡になって4日
ルシス王国　王都インソムニア
王城　大会議場
そこでは連日王都襲撃事件に関連した会議が連日行われていた。

「昨日も王都に近づく大型魔導船数隻が空から降り注ぐ巨大な剣に貫かれ撃墜されていくのを兵が視認した模様です。恐らく襲撃事件にノクティス王子が召喚した剣神バハムートの剣だと思われますが望遠鏡ではその姿を確認できなかったようです。」
「ノクティス王子がこの場にいれば剣神による攻撃なのかと確認できるのですが・・・・目を覚まさないとなると・・・・・」
調印式襲撃事件から今日まで体制を何とか整えたニフルハイム帝国は数度にわたり帝国軍を派遣しインソムニアの占領を試みていた。
だが、インソムニアが視認できる距離になると空から巨大な剣が降り注ぎ魔導船が次々と叩き落されていきニフルハイム帝国はインソムニアへの侵攻を未だできずにいたのだ。
「だがノクティス王子があのような力を有していたとは驚きですな。魔防障壁無き今、ノクティス王子の力は王都防衛には必須。都合よくフィアンセのルナフレーナ様もおられることです。壁の外のオルティシエで挙式を上げる必要はありませんなあ。」
「左様、ノクティス王子にはインソムニアを出ていかれては困る。軍事の要ならば必要時以外は王都から離れないようにしていただかなくては。」
ノクトのことを以前から陰で金の無駄、親の七光り、無能呼ばわりをしていた一部の年老いた文官達が襲撃事件を機に手のひらを返したようにノクトのことを称賛し、そして自身の身の安全のためにインソムニアに縛り付けようとする様にグラディオラスは黙っていられなかった。

「おい、ノクトをご都合の良い駒扱いにしてんじゃ・・・・・・」
　先の発言をした文官に文句を言おうとした矢先、レギスが右手を挙げグラディオラスを黙させ文官たちを諌める。
「ノクティスのことはノクティス自身が決めることだ。我々がノクティスの処遇を決めることではない。それにノクティスにはクリスタルより与えられた使命がある。その使命その使命を果たすためいずれはこのインソムニアを出ていくだろう。」
「レギス陛下。お言葉ですが、ノクティス王子がいなければインソムニア防衛は成り立ちません。どうかノクティス王子を王都から出立させないよう申し上げます!!」
　レギスの意見に納得できない文官が声高々と宣言したその時。

「なんか面白い話してんじゃねーの。俺がなんだって?」

　大会議場に響き渡った声にレギスやグラディオラス、王の剣の隊員含め全員が驚愕する。
「この声は・・・まさか!?」
　その声の主は数日前、歴代の王に串刺しにされ婚約者であるルナフレーナにつきっきりの看病を受けていたはずである。
　その第一王子、ノクティス・ルシス・チェラムの姿が大会議場入り口にルナフレーナを伴ってあった。

「よう。ワリい待たせたな。」